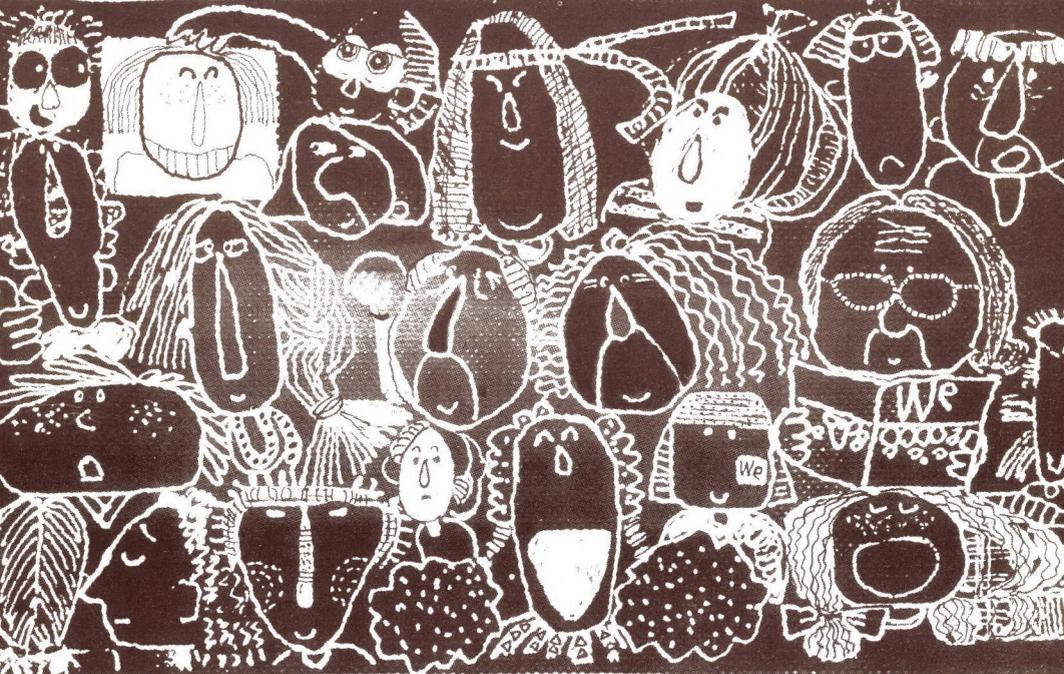


くらしと教育をつなぐ

# We

女と男の家庭科新時代



1994  
10

特集・教育—つながりを取り戻す

川崎ふれあい館のあゆみ（朴栄子・三浦知人），座談会「障害児を分断しないで」，ホリスティック教育—まず自分自身に優しく（ジョン・P・ミラー氏の講演より），米国フリースクールの新たなステップ（吉田敦彦）他。

# 大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 電話03-3294-2221

麻田力氏  
大宅映子氏  
絶賛

# 月に一度のはがきが高校生を変えた おじいちゃん、おばあちゃん お元気ですか

……女子高校生と老人ホームのお年寄りとの交流……

九州女子高等学校教諭  
橋下京子 編著

## ひとクラスから始まった活動が 全校生徒に広がった女子高校生とお年寄りとの 4年間にわたる交流記

担任教師の呼び掛けて、老人ホームのお年寄りへ毎月はがきを書くことになった生徒たち。この交流で生徒たちは、自分をみつめ、お年寄りから様々なことを学ぶ。本書は、6,000通を超える手紙の中から270通を掲載するほか、生徒の感想文や高齢者の家族からの礼状なども紹介。

手紙が人を励まし、勇気づけること、高齢者や障害者と共に生きる社会をつくることの大切さが伝わってくる。



マスコミで  
大評判!

NHKテレビ「新日本探訪」、日本テレビ「ズームイン朝」、フジテレビ「おはようナイスデー」、朝日新聞、読売新聞(編集手帳) 産経新聞、日本教育新聞、西日本新聞などで紹介。

四六判・282頁  
定価1,545円

## 目と耳でわかる健康づくり 大修館ビデオシリーズ

〔VHS、カラー〕●税込価格各20,600円

新刊	ライフステージと健康 (45分) 近藤真廣 監修・指導・出演
	思春期と性 (25分) 林 謙治 監修
	受精・妊娠・出産の生理 (25分) 本多 洋 監修
続刊	結婚と健康
	母子の健康
	加齢と健康

発売中

食事と健康 (25分) 辻 啓介 監修
運動・休養と健康 (25分) 小林修平 監修
喫煙と健康 (25分) 浅野牧茂 監修
飲酒と健康 (25分) 丸山勝也 監修
大気汚染と健康 (25分) 小野雅司 監修
水質・土壌汚染と健康 (25分) 村上正孝 監修
自然環境とその保全 (25分) 村上正孝 監修
上・下水道とその整備 (25分) 眞柄泰基 監修
廃棄物とその処理 (25分) 田中 勝 監修
エイズとその予防 (30分) 山崎修道 桜井賢樹 監修・指導

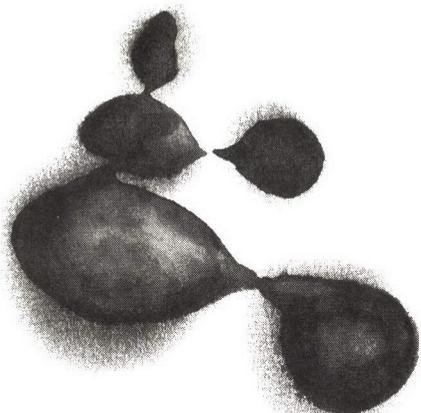
くらしと教育をつなぐ

# We

10月号

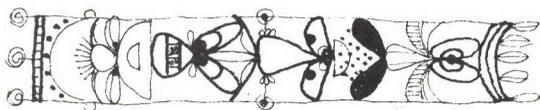
---

特集 教育—つながりを取り戻す



Tami

- 四人冗語 木村栄・津田正夫・野村康子・武田秀夫…………… 36
- ホスピス千夜一夜物語 森津純子…………… 38
- 木を植えた日 蒔田直子…………… 50
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎…………… 53
- わがままなまま、私のまんま 山本聡子…………… 54
- きき耳ずきんの森から 井内好子…………… 56
- 居場所考 水田宗子…………… 58



- ◇ 読者のひろば…………… 61
- ◇ Weの屋台村…………… 64
- ◇ 編集後記…………… 68

## ■ 特集 教育 — つながりをとり戻す ■

- ☆ 川崎ふれあい館のあゆみ まとめ 稲邑恭子 …… 4  
 ① わかってくれる人がいるということが 朴栄子 …… 5
- ② ともに生きる地域社会をめざして 三浦知人 …… 11
- ☆ 座談会「障害児を分断しないで」 まとめ 中村泰子 …… 16
- ☆ ホリスティック教育—まず自分自身に優しく  
 ——ジョン・P・ミラー氏の講演より——  
まとめ 橋本恵子 …… 22
- ☆ 米国フリースクールの新たなステップ 吉田敦彦 …… 29

## 女と男の家庭科新時代

- 家庭科転職情報《男性編》 南野忠晴 …… 35
- 家庭科—遊ゆう・惑わく  
 —共通の知識と体験が生まれて 南野忠晴 …… 40
- これでバッチリ家庭科玉手箱 浅井由利子 …… 46
- 共学家庭科の窓 石川尚子 …… 48

# 「川崎ふれあい館」の あゆみ

(まとめ稲邑恭子)



JR川崎駅からバスで約十分、川崎市南部の桜本町、京浜工業地帯に隣接する地域に「ふれあい館」はある。強制連行を含め、安価な労働力として使われた在日韓国・朝鮮の人たちと、その二世、三世が数多く住んでいる地域で、工場公害の直撃を受けた地域でもある。

日本人と韓国・朝鮮人を主とする在日外国人が、市民として、子どもからお年寄りまで相互のふれあいをすることを目的にし、一九八八年六月にオープン。川崎市が設置し、社会福祉法人青丘社が運営にあたるという公設民営のかたちをとり、識字学級、ハンゲル講座を始め、料理、踊りなどの民族文化講座、歴史講座などを開設し、韓国・朝鮮関係の図書・資料も多く一般に公開している。教会での無認可の保育園から出発し、青丘社として一九七三年、社会福祉法人の認可を受け、保育園、学童保育、中学高校生、若者たちのたまり場づくりと着実に歩みを重ね、発足当初から障害児も受け入れてきた。

初期からのスタッフである三浦知人さんと、四人のお子さんを育てながら、青丘社に関わり続け、今は学童保育の指導員をなさっている朴栄子さんに、青丘社と「ふれあい館」の歩みとこれからについてお話をうかがった。



わかつてくれる人がいる  
ということが

朴栄子  
パク ヨンジヤ

上の子が生まれたとき、桜本保育園が零歳児保育をやっていたなかったので、近所の保育園に入れました。ほとんどが日本人で、うちの子のように本名を名乗っているのは、百何家庭の中で、三家庭だけ。途中で転園することでもできたけど、せつかくそこで作った人間関係をそのまま続けてみようかなって、結局、全員同じ保育園に行かせました。

上の子のときは、初めてですから、一生懸命事情を話したんです。また、そういう話を受けとめてもらえる先

生にも出会いました。二番目の子がチマチヨゴリを着たがらなかったとき、保育園に相談したら、みんなが着たら着れるんだったら持って来て、と言ってくれ、私も着たい、と言ってくれる先生もいて、三、四、五歳児と先生たちに、とつかえひつかえ着てもらったりもしました。

私自身は、二十二歳まで日本名を名乗っていました。就職口がなくて、民族系の仕事に就いて本名を名乗ったのだけど、しばらくは使い分け、心から名乗るようになったのは二十五歳からです。

五年生のとき転校したんですが、一目目、同じ方向だというので一緒に帰ってくれた友達が「どうせ、いづれ、わかるから教えるけど、私は韓国人なの」と言うんです。「えっ、私もそうよ」と、言ってお互いとっても嬉しくなったのですけど、そのとき、初めて、「ああ、人に言っていないかったんだな、私は」と意識しました。

中学の時は知られたくないと思った。高校の時は、伝えなかったけど、伝えられなかった。学生時代は、何人だつていいじゃないか、そんなこと、つて、悟りを開いたようなつもりで日本名を使っていたけど、でも、それはやはり認めたくなかったからだと思います。自分の苦しみを人に伝えていなかったのね。

教員志望だったけれど、高二の後半に教員になれないことが分かったときも、誰にも相談できませんでした。大学でも、みんな教員試験の勉強しているのに、ひとりしないのを見て、どうしてと聞かれ、そんなはずはないと言われ調べ直して、結局、三重、静岡、大阪が受け入れていたのが分かって受けただけ、結局、準備不足でだめでした。

それでも、あのころは、朝鮮人だから、日本に住まわせてもらっているから、しかたないと思っていました。差別だと感じるものがなかった。隠していて当たり前だったのね。いま、本名で生きている子たちを見て、自分は結構嫌な目にあつてきたのに、気づかなかつたんだなと思う。気づかなかつた自分がつらい。いまでも「権利意識がない」と言われるんです。「だつて、居させても

らつていると思つていたんだもの」つて笑うんだけど。今はね、自分が我慢することで、差別が温存されていってしまう、朝鮮を抹殺することになるんだ、と思うから、できるだけを言つていくようにしています。目の前の朝鮮人がそれは嫌なことなのだときちんと言うことで、気づいてくれる。それを飲み込んでしまうと、その場はいいとしても、その先その人はどこかでも、他の人を傷つけていきますから。

子どもの保育園の保護者会で、「自分の子どもは朝鮮人で、自分もそうで、自分は隠してきたけど、この子たちにはそんな思いをさせたくない、朝鮮人として生きていつてほしい」という話をするんです。「オンマ、アツパ（お父さん、お母さんの幼児語）とか、通じない言葉話す事があるかと思うけど、理解してほしい。どんなに小さい子でも、自分の言葉が通じないと、使っちゃいけないと思う。自分は人と違うんだ、受け入れてもらえないんだと感じるから」つて。そのことを周りの大人も知つていてもらえらうれしいんだ、つて、十年くらい言い続けてきたんです。

つい先日、学童保育の説明をしにいったときに、ある

お母さんが、「地域の学校に朝鮮人が多くてよくないと聞いたので、越境させたいけど、学童には入れますか？」って聞くんです。「入れますけど」と言ってから、「実は私も朝鮮人なんですが、朝鮮人が悪いってどこで聞かれましたか？」って聞いたんですけど、そのことがショックで。

うちの子が悪いってことなのかな、明るく伸び伸びと育ててきたつもりだけど、地域でそういう評価をされてしまうんだったら、どういう子育てをすればいいのか、勉強もしついても日本人以上になければならないのか、って、ずっとひっかかっている、三番目の子の保育園の懇談会の時、話してみたいです。

そしたら、お母さんたちが「なに言っているのよ、親の目の高さで子育てして、それがいいことなの？」とか言ってくれて、ふつう、朝鮮人の話すると、たいてい浮いてしまうんだけど、そのときはみんな一緒に考えてくれてうれしかった。桜本保育園に移したほうがいいのかと、何回も思ったけど、居続けた甲斐があったのかなど。

上の子はインへ（仁恵）という名前なんですけど、リ

エゾンすると、イネになるので、「稲」と言われて悩んでいた時期がありました。二年生の後半だったかな、二番目の子が、「イネってお米よね」と言ったら、大泣きした。「学校でもそう言われる、とてもいや」と。先生に話したら、フォローするつもりで、「稲はお米になって、人間に大切なものなんだよね」と声を掛けてくれたのが、「先生までも言う」と逆効果。

朝鮮人は、子どもの頃から、何回も繰り返し聞かないと分かってもらえないと言う経験をしているのね。何回も聞き直され、最後は、「あつ、そうなの」と言われておしまい。「インへの名前は日本の稲の名前じゃない。朝鮮語だ」と言う。「日本の名前にしようか」と聞くと、「いや、日本の名前はいららない、でも、ちゃんと、イネでなくインへと呼んでくれ」って（笑）。

その後、一月くらいして、学校に行けるおまじないをしていたのね。つまらないのかなと思っていたら、ある日突然、「なぜ韓国に帰って言われるの？」と言う。「そんな、帰れと言われても、どこに帰ったらいいだろうね、オンマも帰るところ無い。どうして帰らなきゃならないのって話ししなきゃならないね」と話した。それ

で、これは担任と話さなくちゃと学校に行ったら、さすがにびっくりされて、翌日、みんなに「インへさんはつらい思いをした」と話してくれたようです。「みんなに言ってくれたよ」とすごうれしそうだった。

「でも、先生が言っても、隠れてまた言われるよ」と言ったら、「もういいの、今度言われたら、みんなが先生に言ってくれる」って言う。自分に味方が出来た、その心強さだったのかなと思っただけ、最近気づいたのだけど、自分が傷ついたということを知ってくれる友達が多かったことが彼女の支えになったんです。周りに朝鮮人が多いか少ないかじゃない。朝鮮人を理解してくれる友達がいるかいないか、いれば、たとえ朝鮮人が一人しかいなくても伸び伸びしていられるんですね。

でも、学校の先生は、四十何人の授業を一人のためにという感覚はないのね。日本人にとって、朝鮮人のことを考えるのが、心が豊かになる教育だという視点がない。外国人教育と言うと、外国人の子どもにとつて、ということしか考えないのね。それはもちろん大切だけど、それだけではない。日本人も共有することで初めて心が通じあえると思うの。

ひとりひとりの朝鮮人が強くなるのも大切だけど、本名を名乗るのはとっても勇気がいること。高校生が大変な思いをして名乗っている場面を見る度に、日本人が理解してくれないのに、その子たちのお尻叩くだけでなく、受けとめてやるぞという集団づくりをしなくちゃいけないんじゃないかと思う。私が若ければ、「自分が強くないか知らない、言えない朝鮮人が弱いんだ」と言っていたかも知れないけど、本名を名乗っている子を育ててきて、そんな強さを子どもに求められないと思う。自分で表現できない子だって生きていける社会が大切だと。

青丘社は今年で二十周年です。いまは「アンニョン」と堂々と言いあう地域になったけど、十年前は、青丘社の中では本名でも、学校から帰ると、名札を隠していたんです。朝鮮の子は桜本小学校で二割くらい。運動会で農楽（韓国・朝鮮の収穫を祝う舞踊）をやるんです。小学生が出るようになって今年が三年目。一年から三年までが対象なのだけど、衣装が三十しかないのにそれを超える応募者があって、上級生もやりたいと言ってます。ふれあい館では、チャンゴ、踊りの教室は、日本の子も一緒にやっているけど、週一回だけ、ケナリクラブと

いう朝鮮の子どもたち同士の間で仲間づくりの場があります。すると、「朝鮮人だけ集めるのは逆差別ではないか、分ける事で差別が起きるのでは」という声が出る。日本人の子が「あの子が行けるのに、僕は行けない」とうらやましがるとか、日本人と朝鮮人を意識する事が差別になるのではと言うんです。にこにこ仲良くすれば差別はなくて、分けて淋しい思いをすると、差別が起こると感じるみたい。

それをそうでないと説明するのが大変なんです。私の中に、居させてもらっているという感覚が残っているから、そう思っているだろうなと思いつつ、言うから難しい。でも、どこかできちんと鮮明な記憶がなきや駄目だと思ふんです。そうでないと、ずっと一緒にいても、朝鮮人がいた、つてことを思い出さなくなっちゃう。違うものを持つているのに「同じ人間だよな」と言われちゃうと、「えっ、私違うんだだけだよな」と言われちゃうのはつきりさせることが認めあうことにつながる。

例えば、葬式も違うのね。日本人は悲しみをこらえる。朝鮮人にとっては、泣くことが大切なこと、人前でも、大きな声で泣く。小三の国語の教科書に「三年峠」がで

てくるので、朝鮮のこと教えて下さいと言われて、横浜の小学校にときどき行くのだけど、日本人ならさめざめと泣くところを、朝鮮では「ああ、悲しいよ」と、机を叩きながら大声で泣くんだけよって教える。物語の意味が違ってくるのね。

それから、保育園で「スープにご飯を入れて食べる、困ったもんだ」と言われるけど、私たちは汁掛けご飯が当たり前なのね。「それを悪いことと言われると、うちの子の毎日していることは悪いことになってしまう」と言ったら、先生がはつとして、うちの子だけはいいという。そういう問題じゃないと思うのよね。たまには、「○○ちゃんの国の文化だから、みんな食べてみましよう」というような柔軟な発想がほしい。私も、朝鮮を嫌っている頃は取り皿を使っていたけど、いまは、もういいじゃない、と、大皿から直接食べてます。保育園から、子どもの食べた量を聞かれるけど、ひとりひとり取り分けないと、食べた量が分からないのね。それを、だらしのない親と見るか、文化の違いとしてみるか。

私になぜ、「居させてもらっている」と思ったのかと

いうと、日本の学校の中で、朝鮮人がどうして日本にいるのか、一言もないから、自分の中でそう感じたのだと思う。学校の中で触れられていない。近代史をやらなから、何で自分が日本にいるのか分からない。

指紋押捺を拒否したとき、最後に、検事から「外登証をどうして持ち歩かなかつたのか、そんなこと当たり前じゃないか」と言われて、それだけは許せなかつた。いつ私たちに外国人教育をしてくれたのか。「こんな大切なものを」と言うなら、いつそのことを教えてくれたのか。外国人教育をしてくれたことなのに、何かあつたときにお前ら外国人だと言う、そんなの、知るかつて。

よく、差別のない時代だから、日本人のように生活していいじゃないかって言われる。でも、日本社会の中に、外国人ということで、人権を無視した政策が厳然とある限り、十八、九の多感なときになってシヨックを受ける子がいっぱいいるんです。だから、小さいときから、外国人なんだよと教えて育てなければ。

私は朝鮮人だということ隠して日本人に合わせていく生活だったから、どんなごはんを食べたかという会話だつて、ウツとつまつてしまった。でも、うちの子は、オ

ンマ、アツパという調子で学校でも朝鮮語を使って、作文にも使つてカッコして説明文を書いている。違つていから教えて上げるのが当たり前、という感覚がある。

一年生になつた時、教科書にひらがなで名前をつけようとしたら、「どうしてひらがなを書くの？ 私の名前じゃない」つて言う。親が使い分けてしまったことに気づいて、何日でいじめられて泣いて帰つてくるかなと覚悟しながら、全部ハングルで書きました。二年生になつて、担任が変わつて、どうかなく思つたら、自分でハングルにふりがなを打つことを覚えたのね。私が「学校はこういうものよ」と一言言つていたら、社会はそういうものなかと思つて大人の社会に引きずり込まれただらうな、余分なこと言わなくてよかつた、と。

二人の子の育てと、私が朝鮮人として生きていく時期が重なつていたから、子どもから、いろいろなことを学びました。一人一人の朝鮮人が強くなることも大切だけど、日本社会が心が豊かになつて、誰もが生きやすい場所になつていくことが大切。この地域は本当に変わりました。でも、広がりがないことが残念。この地域を一步出れば、ここ十年も前と同じ状況なんです。



ともに生きる  
地域社会  
をめざして

三浦知人

\*本名を名乗る

子どもに自分達のようなみじめな思いをさせたくない、人間として当たり前に本名を名乗って、堂々と生きていかせたいと思つて声を上げた、ひとにぎりの母親たちがいて、その子たちをどう支えていくかが、そもその運動の出発点だったんです。母親たちが勉強会を開いたり、保育園の保母さんたちと民族保育について話し合つて、保母を韓国に留学させようじゃないかという話になつたり、非常に短期間に、今ある活動の原型が出来ました。

は悪いときちんと言つていくことは、当たり前なことだけどいままででないことで、大変な労力がある作業だった。その勇気ある第一歩を僕らの先輩達が記して、この運動は進んできました。

しかし、その歩みは、必ずしも平坦ではなかった。保育園では、みな、生き生きと本名を名乗っていたのが、小学校に入ると、「朝鮮人、朝鮮帰れ」と言われる。僕は、本名を名乗らせ、韓国・朝鮮の文化をプラスのイメージで爆発させたいような思いで、行事などを、結構

それまではこの地域でもそういう流れは存在しなかった。日本の社会にまともにも申すなんて、考えもしなかつたんです。税金を同じように払つていて、何で社会保障が受けられないのかという当たり前のことから、僕らが声を上げるまでは、「そんなこと言つたつて」というような、あきらめ、絶望、自暴自棄が地域の中に渦巻いていました。日本人との関係をきちつとしながら、悪いこと

派手にやっていたんですね。そんな中で、低学年の子どもたちは、通称名で学校に行っている子も、本名を呼び、名乗る環境ができ、クラスの中で本名で呼び合う。すると、先生は、そのことで何かあったら大変と、「○○君、ここではそんな名前じゃないでしょう」と注意してしましうし、「そんな名前」と言われた子は傷つく、という状況があつたんですね。

保育園では民族クラス、学校に入れば学童クラブ、高学年になると民族クラスを作ったりして支えてきた子たちが、高学年になる頃から「嫌だ」、「しんどい」と言い出し、本名を名乗っていた五年生の子どもたちが通称名に変わることが相次いだんです。このままでは潰されてしまうという切羽詰まった状況になり、青年たちやオモニたちが中心になり、川崎市教育委員会との話し合いを始めました。青丘社ができて、九年目、一九八二年のことです。

市教委側に、学校現場に差別があるという現状を認識してもらうのに二年かかりました。運動がうまくいかない焦り、信念のぐらつきなどが当然あつただけけど、交渉の過程でオモニたちが切々と差別の体験を語るのを聞

く中で、参加している僕らも、本名を名乗る意味を改めて確認できたと思います。最終的に、行政の側できちんと受けとめてくれる人に出会いました。それまでは行政の側では、差別を認めたら何を言い出すか分からないから怖かつたのだらうと思います。

#### \*ふれあい館ができるまで

行政側が差別を認めてからは、とんとん拍子に早かつたですね。八四年に桜本中学校、桜本小学校、東桜本小学校がふれあい教育の指定校になり、先生たちがどんなことを学校実践でやっていたらいいか、青丘社に聞きに来る。こちらは持てる資料を全部渡すと、学校ではやれることからやる。一年間くらいは、子どもが、校長先生が朝会で民話を読んだとか、調理の時間に商店街にキムチを買いに行つたとか、何をやったか報告にきました。それくらい子どもは学校が朝鮮のことをやったことについてすごく反応するんです。

休み時間、先生の所に行つて、「僕の家、チマチヨゴリあるんだよ」と言つて、先生も「そう、じゃみんなに見せてあげてくれる？」と言うようになる。自分の知っ

ている限りの朝鮮語を先生に教えようとする。そういうふうになると、子どもたちが自分の家のものを持つてきて、ふれあい教育の仕掛人になるんです。

親たちも、ぼくらが言っているうちは、「そんなきれいごとと言ったつて」と非協力的だった人も、学校がやり始めるとすぐ協力的になる。活動が市民権を得たんですね。ふれあい館が建つ三年くらい前までは少数派の活動を余儀なくされていましたが、ふれあい館が建つときも反対運動がありました。「朝鮮人に頭さげて公の施設を借りたくない」「朝鮮人だけのための施設になるんじゃないか」という民族差別的背景だけでなく、僕らは障害を持つている子とのつきあいが長いですから、養護施設を作るな、非行少年を甘やかすなとか、僕らがいちばん力を入れてやってきたことをことごとく否定してくれました。

話し合いの席についてくれないから、会館の館長に行政マンを出向させるとか、運営協議会に町内会を参加させるなど、妥協案を市が示し、それでも、なかなか合意ができず、着工が一年遅れました。でも、開館してみると、町内会もふれあいの意味が分かったと言ってくれる

ようになって、いまは町内会と一緒に街づくりをやっています。

民族差別の問題で、行政の責任で、税金を使って会館を建てたのは、ここだけじゃないですか。行政の建物の中で、行政の契約の中での事業委託です。市民運動と行政のパートナーシップをきちっと結ぶということで十年来話し合ってきました。

いま、何がいちばん問題かと言うと、国籍条項の完全撤廃じゃないかと思っています。在日韓国・朝鮮人として生きようとする、自分たちが市民権を回復することにつながる福祉とか教育に携わっていきたくないと当然思うわけです。そういう人たちが生活の糧を得ながら、そのことに没頭できるのは公務員の仕事でしょう。民族差別をなくすことは公務員の仕事、日本の社会の公の仕事ですからね。そしてまた、自治体の公務員試験に国籍条項があることが、民間企業及び、日本社会の就職差別の構造を生み出しているんです。

#### \*同化教育にしないために

国際理解教育という名目で学校教育は進んでいるんで

すけど、その枠組みの中で展開してしまうと、在日の子たちは「やっぱり自分は日本人だ」と言うんです。朝鮮人と言われても、自分の中に朝鮮人としての何ものもない。日本人と同じ文化の中で生きてるのに、いきなり理解される側に立たされる。本名を名乗るのが嫌だという子が出てくる。国際理解教育といえば聞こえはいいが、その流れで在日二世三世の問題を見ていくことには問題があると思います。その子たちがきちつと立てるように支えるのが本当の民族教育なんです。

ニューカマーの人たちの状況は在日朝鮮・韓国人のいつか来た道を同じようにたどっているのに、日本社会はそれを全然教訓にしていない。これから多民族共生社会で出てくる諸問題は、在日韓国・朝鮮人問題でもう既に経験済みのことだから、それをいまいっかかり解決しようという視点がなければならぬんです。

それなのに、例えば、このあいだ、行政で出した住宅問題の啓発誌を見たら、民間アパートを借りるための案内を三か国語で書いてあるんだけど、入るためには保証人がいるとか、日本人を連れてったほうがいいとか、要するに、きちんと使いさえすれば貸してもらえると

前提に立った、そのための解説本なんです。日本の社会で借りるのは困難だから頑張りましょうの一言でもあればまだしも、民族差別の「み」の字もない。行政がそんなパンフレットを作る金があるなら、家主を啓発するために使えと言いたくなる。コミュニケーション障害を克服することに一生懸命で、これは在日朝鮮人問題の側からみると、完全に同化教育です。自分たちが精神的に追いこめておきながら、メンタルヘルスをしなければならぬという。その人の立つ場、育った環境なり、民族的背景なりをきちつと尊重しようという背景がないから、例えば、ブラジルから来た子がいたら、その子についてポルトガル語を学ぼうという輪ができないんです。

在日朝鮮人のところに嫁に来た韓国人の人なだけけど、流暢な韓国語喋る機会ないから、子どもはいつもたどたどしい日本語を喋るおどおどした母としてしか見ていない。だから、お母さんは無知だと思っていて、「オモニに韓国語の発音を教えてもらったら」と言うと、「オモニは何にも知らない」と言う。社会の側が変わることを拒絶し、同化しようとする。こんな社会でニューカマーの人たちが立てるわけないですよ。

いま、日本語教育のブームもあるでしょ。その流れに学ぶとか教えるとかの原点が失われているんじゃないかと思うことがあるんです。一世の人たちの、字なんか知らなくたって七十、八十まで生きてきた、自分流で生きてきたそのパワーたるや本当にすごい。その人たちにとって、いま銀行に行つて名前が書けるようになったことが学ぶ喜びになっているんだけど、例えば、その人たちの濁音を直すことが必要でしょうか。教えることより、そのパワーをわけてもらうことのほうが圧倒的に多いのに。教える人が自分の人生を振り返るほうがよほど大事ですよ。

### \*これからの展望

在日の一世代の人たちがね、いい社会に向かつていてという実感を持つて最後の時を送つていただくような条件を整備したい、その活動拠点を作りたい。

障害者のほうも、共に生きるということで保育園や学童保育のレベルでは場を共有するということを一生懸命やつてきたけれども、青年になると、今度はそれなりのたまり場が必要になってくる。川崎の場合はどこか昼間

行く場所はあるが、夕方から朝までと、土、日に居る場所がない。高齢、障害者の場合はどのみち在宅支援活動になるし、センターが必要だと思ふんです。

あとは、一世の人の記録が必要だから、歴史資料記念館とか、博物館、イベントホールもほしい。やりたいことはいっぱいあるんだけど、金はないですから、出所を探さないとな（笑）。

### \*国籍条項

医療・看護・労務系を除く一般職の採用にあたって、日本国籍を持つことを条件にする地方自治体が多い。七十年代から八十年代にかけて、尼崎市、西宮市、八尾市、豊中市、高槻市などが先駆けて国籍条項を撤廃。神奈川県下の市町村の多くは九二年度から撤廃したが、都道府県と政令指定都市は依然門戸を閉ざしている。

\*川崎ふれあい館

〒二一〇 川崎市川崎区桜本1-5-6

(044-276-4800)



会談座

荒井せつ子／田中由紀子／中畝治子／まとめ 中村泰子  
瀧澤久美子（横浜市在宅障害者援護協会・地域コーディネーター）

◆普通学級か、特殊学級か、養護学校か

荒井 長男の良太は、三歳児健診の時に自閉的傾向と知的発達の遅れがあると言われました。例えば、電車にすぐこだわって、少し前までは生活のすべてが「電車」という感じでしたし、一人で遊んでいれば安定しているけれど、お友達と関わりを持たせようとすると大声を出してパニックになる。

今は十一歳で、普通学級の六年生です。とうとう六年間普通学級で通してしまっただなあとという感じです。良太の下に小学校三年生の弟がいます。

田中 靖子は三人兄弟の末っ子で、八歳。小学校二年生です。知的にも発達の遅れがあり、今は特殊学級に通っています。

生後六か月でまず目がおかしいと言われました。あやすと良く笑ったけれど、ものを目で追うとか、触ろうと手をのびたりしないのでちょっと変だなとは思っていたんですが、焦点があっていませんでした。それで一歳九か月で斜視の手術をうけました。手術後、保健婦さんからリハビリセンターを紹介されたんですが、いっぱい通園できなくて、「こまどり園」という通園施設

に通いました。目のせいだとも言われたんですが、なかなか足が前へ出なくて、三歳過ぎてようやく歩くようになりました。四歳からリハビリセンターに週三回通い、五、六歳と、リハビリセンターに通園しながら地域の幼稚園に通いました。自由保育の幼稚園で、とても楽しくそうに通っていましたので、そのまま地域の子どもたちと過ごすのが自然だと思って、姉妹の通う日小学校に行かせたいと思ったんです。日小学校には特殊学級が無いので、特殊学級を作ってほしいという働きかけをしていたのですが、新しい学校なのでどんどん生徒数が増えて、ますます作れなくなっているとのこと。「空き教室があれば」といつも言われるんですけれど。

中村 なぜ普通学級ではなく特殊学級をと？

田中 今でも不器用で、服のボタンをはめるのも、身の回りのことも自分ではできないですし、理解力もずいぶん遅れてますから、みんなと同じに普通学級にというのはとても無理だと思っただけです。

校長先生からは、とりあえず普通学級に入ってみませんかと言われました。現実に特殊学級が必要な生徒がいれば、先生の増員も要求できるからと。ただ、普通学級

のみんなが迷惑してる状況が必要だという言い方が引掛かったのと、わが子は身辺自立ができていないので、やはりみなさんに迷惑をかけるだろうし……。

瀧澤 校長先生が普通学級を勧めたのなら、入れてみると何かい反応が起きたかもしれない。

田中 でも、子どもにとっても、できないことを指示されて、ただ四十五分間教室に座っているだけだったら、やはり辛いだろうと思って。どうしても勇気がでなくて、その時はできなかったですね。

荒井 近所の学校では生徒が減って空教室ができたというので、普通学級についていけない子どものために特殊学級が増設されたそうです。

中畝 でも、その子たちが今まで特殊学級にいた子どもを苛めるんですって。あんまりひどいので親が心配して先生に相談したら、「あの子たちは今までさんさん普通学級で苛められてきたんだから少し我慢してください」って先生に言われて、特殊学級から養護学校に移ろうかと悩んでいるお母さんの話を聞きました。結局何も解決されないで、いつも、より弱い子のほうに嫉妬せがいく構造って、何なのでしょうね。

### ◆学校という「場」のもつ力

荒井 私は今とはずいぶん違うんですが、子どもが五歳や六歳の頃は「普通」がいいというのがまずあって、何とか普通に見えないかという気持ちでいたんですね。

就学時健診という一大イベントをいかにやりすごすかという気持ちがあるすごく強くて、何がなんでも普通学級に入りたいと思っていたのです。健診さえやり過ごして普通学級に入れば、そのうち子どもも普通になるんじゃないかという何とも切ない親の願いというか、そんな気持ちでした。

就学時健診を受けてみると、暴れないし嫌がりもしなかったので難無く通ってしまって、そのときはすごく幸せな気分でした。でも入ってみると六年間ですよね。その間に私自身も悩んだり、迷ったり、変わりました。

子どもの状態を黙ったままごまかして学校にいたのは、やはりよくなかったと思います。二、三年生の頃は、親のほうで、来期は特殊学級に移ろうとか、いやこのまままよいようとか、毎日ころころ気持ちが変わって情緒不安定でしたから。たまたま特殊学級のない学校だったんですが、必要に応じて特殊学級のようなところに通え

れば、もう少し楽だったかもしれない。

号令で一斉に動くということに気持ちがついていなくて、気持ちの切り替えもへたですし、今の学校のテンポについていけないんですね。何だか分からないままに子どもがパニックになっていって、私もよく分かっていない親ですから、勉強させればついていけるんじゃないかと思っただけで、家で漢字をやらせたり、いろいろやっただけです。そして秋ぐらいには吃音がひどくなって、どうしようもない状態になっているのに、それでも私は家で補習すれば何とかなるんじゃないかと頑張らせたりして……。ただ、突然計算が誰より早くなったりとかするんです。先生も訳が分からないんですよ。これはとても優れているのに、どうしてこんな簡単なことができないのか、どうしてこんなことぐらいでパニックになって大声出しちゃうんだろうとね。

三年生ぐらいで親も吹っ切れて、学校は本人が行くといえれば行けばいい、あれしてほしいこれしてほしいとは望まない、というふうになってきました。そこで初めて、この子をどう育てていこうとか、この子の将来のことを考えるようになりました。

それでも何とか、中学に行くまでに体だけは作りたい  
と思って、三年生から四年生まで民間の障害者の塾のよ  
うなところに通って整体をならいました。月二回で一万  
三千元。でも、きちんと教えてくれるんですよ。身体  
の仕組みはこうなっているから、ここが弱いから、こう訓  
練したらいいとか。だから頑張ってるなとかかしてやりた  
いと思いました。でも、「訓練」というのは、親の気持  
ちを納得させるためのものだなあと思ったのは、五年生  
ぐらいになって、本人の意思が強くなって、いくら親が  
やらせようと思ってもやれないんですよ。あとは本人の  
意欲に任せるしかないなあと感じました。

六年生になって、学校ってすごいところだと思っ  
ようになりました。こういう言い方も変なんですけど、良太が  
学校に入って、学校も対応せざるを得ないわけです。結  
局、特殊学級に行きませんかとは一度も言われなかつ  
た。特殊学級がないから、学校中の先生が良太の状態を  
知っていて、よく声をかけてくれるんですね。これって  
すごいことだと思うんです。

今のクラスはいいなあと思うのは、「良太君に優しく  
してね、面倒見てあげてね」と良太だけを特別扱いする

んじゃない。「良太もすごい、○○くんもすごい」と、  
クラスの三十三人みんながそれぞれにすごい存在なんだ  
よ、ということが前提にあるように感じるんです。そん  
なクラスを見てみると、良太の存在は大きい意味があっ  
たんじゃないかと思うんです。

本人も親も大変な思いをしたけれど、長い目で六年を  
振り返ってみるとよかったなと思います。

中村 中学はどうされますか

荒井 中学は受験の世界ですよ。子どもたちにも学校  
にも余裕がなくなるから、もう普通学級じゃ無理かなあ  
と思って、進路を決めかねているところです。

#### ◆何を学校で学ぶのか

中村 わたしの卒業した中学には特殊学級があって、小  
学校では同じクラスにいた子が特殊学級に入ったことで、  
ホームルームとか体育のときに一緒になると、みんなが  
その子を汚いといって苛めだしたんですね。学校の中で、  
交流の意味とか、差別の問題とか一度も聞いた記憶がな  
い。可愛そうだから一緒にいさせてあげると感じるの  
交流でした。特殊学級というのと、どうしてもあのイメー

ジがあるんですね。線引きすることで、逆に、子どもの間に差別を作り出したように思うんですが。

田中 特殊学級を選んだのは、作業療法士的な訓練や学習を期待したんです。それから、まず、学校が楽しいところであってほしい、せっかく普通学級との交流があるのだから、普通の子たちからいっばい刺激をもらってほしい、普通学級の子どもたちにも障害のある子どもたちのことを知ってほしい、と。とても欲張って入れたんです。

うちの子はお友だちと遊ぶのが好きで、にこにこしていておとなしいですし、四十五分間教室に座っているように教えられれば、座っているかもしれないけれど、ただ、机に向かって勉強というよりは、靖子は鉛筆も持てないですから、まず持つという練習から始めなきゃいけないんですね。一日中リハビリをしてほしいとは思わないけれど、現実には鉛筆すら持てない子に既存のいろんなプリントが配られていて、こんなことが今必要なのかと。勉強の内容には身体づくりとか、OT（作業療法士）やPT（理学療法士）のような専門的な知識を勉強したり、手探りでも靖子の状態に合った訓練的指導をしてほしい

と思っていました。せっかく特殊学級という制度があるのだから、それを生かす意味でも……。

瀧澤 気持ちには分かるんだけど、今の教育現場で専門家としての訓練まで求めてしまうと、先生はパンクしてまうんじゃないかな。クラスや子どもとのつなぎ役や、きっかけづくりは求めていいんだけど。

特殊学級というのは今の学校の中で隅に追いやられてる存在。特殊学級を担任するのは、新任や転任して来た先生、退職間近の先生が多いというのが現状で、他の先生と関係が作りにくく、なかなか理解してもらえないもどかしさがある。お母さんたちはわが子のために良い教育をしてほしいという要求が強くある。学校の中の特殊な位置、そのうえ親からの要求が非常に強いということ、先生のほうが疲れ果ててしまう。特殊学級の持ち手がないということが言われています。ある無記名のアンケートでは三分の一の先生が特殊学級をまあ持ってもいいと、三分の一はどちらでもいいと、三分の一は感覚的に絶対嫌だとか体力的に無理だとか、そういう結果だったそうです。

学校の中身全体を変えていこうという視点で障害児教

育に関わっている先生はごくごく少数です。

中畝 祥太の学校でも重度の肢体不自由児ばかりだから、熱心な先生ほど訓練に一生懸命になってくださるような気がするのですが、私が先生に求めているのは訓練じゃなくて教育だなぁと思うんです。人間を育てる豊かな部分に関わることですよね。重度の子ばかりだから、専門的な知識や訓練はもちろん必要なんですけど、そういうことは専門家が巡回することで補ってもらえばいいわけで、本来の教育の意味というのは何だろうと……。人との関係や社会のこと、そういうことを全部削り落として、勉強のノウハウをゲームのように教えているけど、そういう意味では障害児教育というのは、何を学校で学ぶのかというか、その根っこが見えやすいのかもしれないと、最近思うようになってきましたね。

田中 特殊学級に通わせていて、今の特殊学級は何のために作られたのか、普通学級に支障が出ないためののかと疑問に思うことが多いですね。この子にあった教育って何なのかと……。

普通学級との交流のあり方も、学校によっていろいろらしいんですけど、いまは、朝礼や音楽や体育、週2回

の交流給食を一緒に食べるとか、そのときだけ交流級に行って、交流させてもらうといった感じですよ。

そういうお客さんのような交流ではなくて、私の理想なんですけど、障害のある子にもみんなと同じように自分のクラスがあって、下駄箱や傘置き場も一緒に、朝はまず自分のクラスに登校して「おはよう」って言ったあとに、それぞれの子がそれぞれのプログラムに応じて分かれていく。だから給食も当然自分のクラスでとって。朝の「おはよう」から帰りの「さよなら」まで、そのクラスの一員で、必要な授業を受けに出ていく感じですよ。場合によっては、教室内に指導的介助のできる人をつけるとか。そうすれば子どもたちもお互いに刺激を受けて、障害のある子どもと過ごすことが特別なことではなくなっていくんじゃないかと。

障害のある子は、どうしても限られた人間関係で過ごしがちですけど、お友達と出会うチャンスは同じように与えてほしい、それも統合教育の意味じゃないかと思うんです。

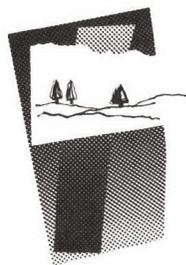
## ホリスティック教育

●まず自分自身に優しく

―ジョン・P・ミラー氏の講演より―

まとめ

橋本恵子



ジョン・P・ミラー氏の講演を聞いて

「ホリスティックという言葉はギリシャ語の『全体』を表す言葉、『ホロス』から来ていて、英語の『ホーリー』、つまり『聖なる』という言葉にも通じます。教育の究極の目標は、星を見れば畏怖と憧れを覚えるその感覚です」

そんな物静かな説明から始まり、「『ホリスティック教育』という名前やラベルはどうでもいいんです。まず、あなたが、自分の人生をほんとうに生きて下さい。泣いたり笑ったり苦しんだり愛したりしながら、世界に自分

ろうかと思つたものです。

その講義が終われば多分一生会わないだろう人々の出会い、「一期一会」ということが、目の前で何度も繰り返され、講演の後などに質問する人に向かって、共感しながら、そのときその場で精一杯応えていたミラー氏は幸せそうでした。そして、質問した人との間にはいつも温かなつながりがありました。

「私は日本で私自身が変わったように思います」。カナダに帰国される前、そう言われたミラー氏もまた、ほん

自身をいっばいに開いて、今を生きてください。ホリスティック教育はそこから始まります」という言葉で終わった二ヶ月、その間にはさまざまな出会いがありました。

『ホリスティック教育―いのちのつながりを求めて』（春秋社）の著者、ジョン・P・ミラー氏の各地での講演に通訳として立ち会った私は、そんな出会いのたびに、幸せというのはこういう時間のことではないだ

とうに関わったとき、相手だけではなく自分もまた変わるという、その実感を持つて帰られたように思います。

ホリスティック教育とは理論やさまざまな実践の技法でもありますが、なによりも、教師として、親として、人間として、あらゆる教育の場面で、相手に自分を聞き、共感し、全的に関わるといふ存在のありかたが根本の問題のようです。今回は、その「自分自身の存在のあり方」に焦点を当てて、ミラー氏の講演の内容をご紹介しますと思います。

(橋本恵子)

### 地球規模の行き詰まりと変化の時代の教育

ホリスティック教育とは、子どもの知的な側面だけではなく、身体的側面や感情的、倫理的、精神的側面など、子どもの全的な存在に関わろうとする教育です。シユタイナー教育や全人教育など、その実践は昔からなされてきて、決して新しいものではありません。

ホリスティックな教育を支えている世界観は、この世に存在するすべてのものは何らかの仕方につながりあい、支え合っているというものです。これは現代の危機のなかで、教育、科学、産業界などさまざまな方面で、時を

同じくして注目されている世界観です。全体はつながりあっており、そのつながりから断片を切りとってその知識を寄せ集めても、全体の理解には到達できない。例えば、経済活動だけを切りとって押し進めた結果が環境破壊です。「全体に関係がない」ものはないのです。ある問題に、あるいは自分に、関係がないものはない。これは環境問題や生態系などの最先端の科学の知識とともにさまざまな精神的伝統が教える考え方でもあります。

ホリスティックな教育は「バランス」「包括」「つながり」の三つの側面から、特徴を述べることが出来ます。「バランス」とは、男性性、独立性、論理、合理性、量、経済といった現在重視されている価値観に対して、女性性、相互依存性、直観、質、環境といったもう一方の価値観とのバランスをとること。

「包括」とは、講義のような教師から生徒への知識の伝達(トランスミッション)、教師と生徒が対話しながら問題解決の方法を学ぶこと(トランスアクション)、知的にだけでなく「自分が変わる」経験(トランスフォーメーション)という三つの教育観について、どの教育観

も排除することなく包括するという意味です。子どもの全体に関わるために、これら三つの教育観はどれも必要です。

「つながり」とは、現在、さまざまに分断されているもの、たとえば、学び手自身の関心とカリキュラム、身体と心、論理と直観、教科と教科、地域社会と学校、地球と人間、そしてなによりも自我と自己のつながりを回復していくことです。

ホリスティック教育は、カナダでは、オンタリオ州が一九九三年に出した教育指針の中で、「すべての教育はホリスティックな観点から見直されるべきである」と明記されました。地球規模での行き詰まりと変化の時代に、ホリスティック教育の考え方は北米で大いに注目を集めています。

### 教師自身の存在のあり方

教室で生徒の前に立つとき、何を、どう教えるかといったことがしばしば議論の中心になりますが、その前に、その先生の存在のあり方が実はもっとも大切です。

子どもたちは、先生の存在のあり方に敏感です。先生

が教壇に立ちながら自分たちではなく別の何かを考えていれば、それが例えば、授業の進め方でも、テストの平均点のことで、子どもたちはすぐに先生がその場にいるのを感じとります。子どもたちがなによりも求めているのは、自分たちの真正面にどんと存在する先生の存在です。

それはまた、子どもたち一人一人を全的な存在として受けとめること、子どもたちとのつながりを感じられる存在のあり方でもあります。このつながりこそが教室で起こるすべてのことの基礎であり、子供たちの内面的な成長を刺激し、また彼らの感情的、精神的ニーズに気づく基礎になるものです。教えることが楽しいかどうかは、このつながりが持てるかどうかにかかっているといっても過言ではありません。

けれども、私たちは十分後、一週間後といった未来のために計算し、過去の出来事に心を煩わされて、なかなか自分をとりまく子供たちの現在であり、自分自身の現在であるその瞬間を生きていくことができます。今、その場所に全的に存在すること。そのためにはどうすればいいのでしょうか。

## 自我の立場から、自己の立場へ

存在のあり方には大きく分けて二つの立場があります。

自我は自分にとつて都合がよいように周囲をコントロールしようとし、「私が、私が」と、常に人の先へ立とうとします。他者の意図と競い合い、勝とうとし、つながりは断絶し緊張します。生徒を自分にとつての都合から操作しようとするとき、教室は葛藤とフラストレーションの連続になります。

これに対し、自己の立場とは、例えば美しい音楽を聞くとき、自然の前に立つとき、あるいは無心に遊んでいる子どもの姿をみるときに感じられる、より共感とつながりのなかにある存在のあり方です。教えることが楽しく満ち足りたものになるのはそういう立場に立てたときです。ホリスティックな教育、つまり、子どもの知的な側面だけでなく、身体的、感情的、精神的なニーズにも働きかける教育を可能にするのは、結局、この教師の存在の「深さ」なのです。この「深さ」とは私たちの中心セルフ（自己）、魂への深さです。では、自我の立場から離れ、他者との温かなつながりが感じられる自分の存在の中心へと自分自身を深めるにはどうしたらいいので

しょうか。

## 瞑想のすすめ

まず、自分の生活のペースを少し落としてみることで、スケジュールに追われ、計画をこなすことにほとんどの時間を使わなければならない現代の生活では、周囲とのつながりを感じる余裕はほとんどありません。私はカナダの大学院のクラスで学生（といっても三五歳から五〇歳ぐらいの現役の先生達、これからホリスティックな教育を現場で担っていく先生達ですが）に、一日の生活の中に瞑想の時間を持つようすすめています。

クラスでは、呼吸法や座禅などの瞑想法をいくつか紹介し、毎日一定の時間、自分に合ったやり方で瞑想をするように生徒に求めています。新学期のはじめには、毎年「忙しい、こんなことはしてられない」といった苦情が出ますが、数週間で変化が現れます。よりリラックスし、エネルギーと創造性が湧いてくるのです。瞑想は、「あれをしなければならぬ、これをしなければならぬ」という時間の流れから離れて、自我が設定した計画や要求ではなく周囲の現実を感じる存在のあり方、存在

同士のつながりを感じる存在のあり方に移る助けになります。クラスに一人、テンションの高い女の先生がいたのですが、瞑想を始めたらず、家族が彼女の変化に気づきました。彼女のテンションが高いような日、子どもが、「ママ、今日は瞑想した？」と聞いたそうです。

### 瞑想は優しい行い　まず自分自身に優しくなる

瞑想法には、イメージワーク、マントラ、息による瞑想、大極拳やヨーガなどいくつもの方法がありますが、今回は、息を数える瞑想（数息観）と「温かい心」（ラヴィング・カインドネス）という瞑想を紹介します。

数息観は、身体をリラックスさせ、まつずくな姿勢で案に座ります。目を閉じ、自分の息の流れに心を向けます。鼻から息を吸い込み、ゆつくりと息を出します。息を出しながら「1」と心の中で数えます。また息を吸い込み、息を出しながら「2」と数えます。このようにして「4」まで数えたら、また「1」に戻って「4」まで数えてゆきます。このとき「4」を越えて「5」や「6」まで数えてしまうこともあります。行き過ぎに気づいたら「1」に戻って同じように数えてゆきます。また、

息の流れに心を向きたいのにいろんな雑念が起こって困ることもあります。決して自分に怒らないで下さい。瞑想は優しい行いです。まず自分自身に優しくなって下さい。雑念が起こっても、それに気づいたときに自分の息の流れに気持ちを戻せばよいのです。リラックスが深まると息も長くなります。はじめは5分ぐらいから始めるといいでしょう。

「温かい心」の瞑想は、クラスを始めるときに行っているもので、この時間がいちばん好きだ、と言う学生もいます。これは、自分の心の中心にある温かい気持ちに焦点をあて、それを自分から始めてだんだん周りへ広げていく瞑想法です。先生が次のような言葉を唱えます。生徒は黙って味わっても、心の中で復唱してもかまいません。自分の息を味わいながら行います。

私が元気で、幸せで、平和でありますように。

この部屋にいるすべての人が、元気で、幸せで、平和でありますように。この建物の中にいるすべての人が、元気で、幸せで、平和でありますように。

この近くに住むすべての生き物が、元気で、幸せ

で、平和でありますように。この街に生きるすべての生命が、元気で、幸せで、平和でありますように。この地方に生きるすべての生命が、元気で、幸せで、平和でありますように。この国に生きるすべての生命が、元気で、幸せで、平和でありますように。この星にあるすべての存在が、元気で、幸せで、平和でありますように。この宇宙にあるすべての存在が、元気で、幸せで、平和でありますように。

静けさとはどういう状態か、現代の生活は体験する機会がとてまもなくなくなっています。けれども一度それを味わえば、大人も子どももそういう時間が好きであり、落ちついた穏やかな瞬間を欲しています。そういう瞬間をまず先生が生活のなかで味わい、教室でも分かちあつて下さい。その静けさの中ではじめて、自分とすべての存在とのつながりを味わうことができるのです。

間とは、なにもない時間であり、空間ですが、現代はこの間を何かで埋め尽くそうとしているところがあります。例えば会話がとぎれるのを恐れる。沈黙は言葉やテレビの音やラジオの音で埋め尽くす。部屋は家具でいっ

ぱいにする。しかし、ある先住民の部族では、誰かの家を訪ねて、ただ黙って腰をおろし、しばらく時を過ごして、そのまま出ていくといったことがあるそうです。

### 心をこめることもまた一つの瞑想

瞑想はまた一日の決まった時間だけのものではありません。瞑想とは、おだやかにリラックスして、しかも物事に対する意識や注意がはつきりした心の状態ですが、この状態を日々の仕事や人間関係の中に少しずつ持ち込むことができます。心をこめること（マインドフルネス）もまた、一つの瞑想です。例えば、サラダのトマトを切るときは、明日の授業とか成績とかを考えずに、ただ心をこめてトマトを切る。新聞を読みテレビを見ながら妻と会話するのではなく、テレビを切り、新聞をたんで、会話に心をこめる。ていねいに茶碗を洗う、そういういった小さな日常のなかでも存在のあり方に変化を生み出すことができます。忙しくて息もつけないようなときは、3分でも5分でもいいですから、心をこめて木を眺めて下さい。

瞑想はやさしい行いです。瞑想やマインドフルネスに

よって、私たちは「すべてのものと親しむ」ようになります。これは、身の回りの木や花や草や動物たちや人々と親しくなることです。瞑想によって、宇宙や地球は私たちの友であることがわかるのです。人生が心地よくなります。

### 他人に対するモデルを手放す

花や木を眺めるとき「あの木はなっていない」など誰も非難しません。ただありのままの姿を眺めます。しかし他人に対しては、服装やしやべり方やその他いろいろな点で、「あの人の服装は（しゃべり方は）なっていない」とイライラすることがよくあります。頭の中に「かくあるべき」というモデルがあつてそれを相手に押しつける、そしてそれに合わない人に対してイライラするのです。以前、黙想会に行ったとき、私の隣に風邪をひいた老人がいて、彼のしつこい咳に悩まされてちっとも瞑想できませんでした。長い間イライラしていたのですが、彼の咳を風の一種と受け取って、やっと解放されました。他人に対して「かくあるべき」というモデルを押しつけるのもまた自我の仕業です。そういうモデルは

手放した方が、自由で平和になります。

ユーモアと笑いは、自我の束縛から大きな流れへの解放  
チェスタートンという人が「天使が空を飛べるのは、自分を軽くとっているから」と言っていますが、自分をあまり深く深刻にとらえないこと、自分を笑えることも自我のメロドラマから解放される助けになります。笑うことは癒しです。滞っていた大きな流れが笑うことでまた解放されるのです。マルクス・ブラザーズの映画を見て笑いこころげ、末期の患者が治癒した例もあります。

\*

\*

\*

以上、「存在のあり方」を中心に講演をまとめましたが、ホリスティックな教師の資質として、共感性のほかに本来性、つまり、教師の仮面を捨てて自分の本来の感情や考え方などに気づき、それに正直であることの重要性と、ホリスティックな考え方の人々が、それぞれの現場で孤立せずに枠を超えてネットワークを持つことを、ミラー氏が熱心にすすめておられたことをつけ加えたいと思います。



## 米国フリースクールの

## 新たなステップ

吉田 敦彦

### \*全米フリースクール連合の特別合宿会議

既成の制度化された伝統的なスタイルの学校に代わる、もう一つの学びの場をアメリカ国内で創り出している人たちのネットワークの一つに、NCACSというのがある。大沼安史氏の著『(正/続)教育に強制はいらない』(一光社)で「全米フリースクール連合」として紹介されているもの。その呼び名が日本では通りがいいが、実際のところ「フリースクール」というのは今のアメリカではほとんど使われず、NCACSも、そのまま訳せば

ークである。オープンスクールのように公立学校内部で、もうひとつのアプローチを追求する人たち、また、例えば、シユタイナーやモンテッソーリのようにある特定の思想とスタイルの確立した私学は、このネットワークには参加していない。

さて、九三年二月、底冷えのするワシントンに、アメリカ各地からこの全米フリースクール連合の主なりーダーたちが勢揃いした。いつもは陽気でのんびり、いい意味で「いいかげん」な彼らが、この時ばかりは、びっし

「全米オルタナティブ・コミュニケーション・スクール連合」となる。ニールのサマーヒル学園やトットちゃんの本モエ学園のようなイメージのオルタナティブスクールや、もはや学校と呼べるような特別な場所は持たずにコミュニケーションでの子どもと大人の共同生活そのものから学ぶコミュニケーションスクール、それにホームスクーリングとよばれる各家庭で制度的学校に頼らずに学ぶ人たちのネットワ

り詰まったタイムスケジュールにしたがって、真顔でシビアな議論を3泊4日にわたって繰り広げた。毎年4月末に子どもたちと一緒に開くリースクール大会とは別に、臨時に開かれた特別合宿ミーティング。そしてそのテーマは、「公教育の変革にわれわれはどのように影響を及ぼしていけるか」。

よく事情がつかめないまま、高砂市にあるリースクール「地球学校」の児島さんと二人、招かれるままにこの会議に参加した。密度の高い議論にただただ圧倒され、そのスピードについていけずに途中眠たくなったりして、帰国したときには、会議のあと訪問したリースクール（グラスルーツ・リースクールやアパティナス・スクールなど）の生々しい印象ばかりが大きかった。それに日本のリースクールの現在の状況とは議論のステージがかけ離れているように思えた。

ところが、一年たって送られてきた会議の記録とその後の活動報告を読んでもみると、日本のリースクールの長期的な見通しを考える上で、たしかに十年近くの間差や文化差があるにしても、これは大きなヒントになるかもしれないと思った。そこで簡単にポイントを紹介し

てみる。

「公教育」を全面に押し出した、上記のようなテーマで会議を呼びかけた人たちによれば、全米リースクール連合の役割は、今ターニング・ポイントに来ているという。ほぼ八十年代に相当する最初の十年あまりは、教育面でも財政運営面でも試行錯誤が続き、それぞれのリースクールが互いに情報交換などをして支え合うネットワークだった。いわば自分たちのことで精一杯だった。しかし九十年代に入って、現存するスクールはそれなりの成熟段階にあつて、次のステップは、積み重ねてきた自分たちの経験を実例でもって広く公教育の関係者にも分かち合っていくことだ、という。それに、反公教育の姿勢だけだと自分たちも閉鎖的になつて硬直化していく、という危惧も語られていた。

### リースクールと公教育

公教育とリースクールとの関係については、ときには激しい議論が交わされた。実はこの合宿会議には、公教育の中でオルタナティブ・アプローチを追求しているゲストが数名含まれていた。たとえば、都心の公立学校

が、郊外にも住めず学費も払えない社会的弱者の吹き溜まりのような状況に陥っていることに対して、私学フリースクールの運動は、改善の力になりえなかつたばかりか、むしろ学校選択権を行使できる恵まれた層に選択肢を用意することによって、結果的に状況悪化に手を貸してきたのではないか、という意見などが出された。

それに対しては、たとえば、スライド制学費や奨学金、人種構成などのバランスを取るための定員枠の調整など、そうならないように最初から様々な配慮をしてきた実践例も紹介されていた。しかしそれにしても結果的に十分で、その点はフリースクールが自分たちの運営を確立するのに精一杯だったこれまでの時代の限界として認めて、これからまさに次のステップとして公教育そのものの改革に積極的に貢献していこうという合意になった。

公教育というのは両面性をもっていて、公的に制度化されることで、国家の利益に主導されたり標準化されたりする傾向が常に伴うが、同時に公的助成によって全ての人に（特に自前で学ぶ機会を得るには条件の厳しい人たちに）学ぶ機会を保障することができる。制度化され

た公教育システムからの「解放」自由」は、個々人の私的な責任を強調することになるが、一般に制度に頼らず個人のレベルで学習権を確保できるのは、それだけ既存の社会で特権的な位置にいる人たちだというジレンマがある。日本でも「障害」者や被差別地域出身者の学習権を確保していくうえで、あるいはかつての「高校全入運動」などを考えてみても、この問題は古くて新しいテーマである。

印象的だったのは、八十年代にこのフリースクール連合を議長として率いてきたクロンララ・スクールのパットおばさん（『フリースクール／その現実と夢』一光社の著者）が、締めくくりにミーティングで、涙ながらにこう語ったことだ。

自分は公立学校のあまりのひどさに対する批判から、制度に頼らず意地でも自分たちの手で子どもを育てるというスタイルでやってきた。「うちの子は学校に行けるほど悪い子じゃない」と言い続けながら。でも今日、もう自分の時代は過ぎ去ったと感じた。とても抵抗があつたけれど、公教育との連携に同意しましょう、と。

このパットの涙には大きな拍手があつた。事の深さを

それほど自覚できていなかった僕にも、その場の感動は伝わった。それは、公教育に対する「正・反・合」の、つまり単なるアンチ・テーゼを止揚して新たなレベルで総合される、その瞬間だったからかもしれない。そうだとすれば、忘れてはならないのは、八十年代のアンチ・テーゼが全く無駄な（それがなくても同じ結果に至った）営みだったのではなく、そのアンチ・テーゼがそれなりの実質を伴ったからこそ、これからなされるであろう統合のプロセスを歩めるということだ。同時に、もしアンチ・テーゼにこだわりすぎ、自己正当化と他者批判にしがみついたまま進んでいたら、その新たなステージに入らずに硬直化して退行しはじめただろう。その意味で、あの場は本当に危機感を伴ったターニングポイントだったのだと思う。（ちやうど、パットのクロンララ・スクールと東京シユレとの交流が今春からはじまっている）。

### 公教育の変革への方針

そして合宿の最後に、フリースクールが公教育の変革に影響力を及ぼしていくための具体的な方針が以下のよう

\* いままでは一線を画していた公立オルタナティブスクールとの交流開始（具体的には、公立オルタナティブスクール連合という別のネットワークとの合同全国大会の開催を模索）

\* 公的補助金を獲得する運動（許認可と結びついた学校単位の補助金ではなく、生徒一人あたりに対して払われる、どんな学校に行くことも保障される補助金）

\* 公立学校教師のフリースクール見学やフリースクール全国大会への積極的な招待、また大学の教員養成プログラムや研究機関との連携（経験的に蓄積してきた教育方法や理念の共有化をめざして）

\* 公教育改革のためのモデル法案の作成と教育委員会への働きかけ、など。

そしてその第一の柱として位置づけられたのが、教師教育プログラムだ。会議で日本人にも参加を呼びかけてほしいとの依頼を受けたので、簡単にこのプログラムを紹介しておく。

### フリースクールでの教育実習

N C A C S に加盟するフリースクールが協力して、十

五カ月間（期間は本人の希望により調整）の教育実習を中心とする教師教育プログラムの素案を持って当時の連合代表のデイブ（グリーンブライア・スクール）が来日したし、二年前には、プログラム責任者になったサンデイ（アパティナス・スクール）が日本各地をまわって紹介したので、すでに耳にしている人もいるかもしれない。

当初は海外の人も含めて、リースクールについて実体験から学び、リースクールの後継者になる人を育てることに主眼があった（それに実習費十五カ月三千ドルは苦しい財政の足しにもなる）。それがこの会議で、そればかりでなく、公教育の変革という場合、やっぱり一番大切なのは、一人ひとりの先生の間そのものだから、公立学校の将来の、あるいは現職の教師にも広く門戸を開き、じっくり時間をとってリースクールの実体験から学べる機会として広めようということになったわけである。

個人的には今までも志のある若者が何人もリースクールに滞在して学んでいた。しかし、これをもう少しフオーマルな形にして、大学の教職カリキュラムや現職教

師のリフレッシュ研修に位置づけられるような道を模索することになった。「TEACHER EDUCATION PROGRAM」（教師を教育するプログラム）なんて堅苦しい名称をつけて、参考図書一覧などもついたプログラムのパンフレットもできている。それに課程修了証書のようなものも出すという。かといってそこはリースクールの人たちのすること、何も顔面どおりに受け取る必要はない。こちらの要望をはっきり持って臨めば、柔軟に対応してくれる。（たとえば日本人学生の場合、一年休学して四月から翌年三月の十二月月に短縮とか）。

日本人でももちろん歓迎され、ちようど今年の春と夏に、はじめてこのプログラムを終えた二人の学生が、何かふっきたような、実にいい顔をして帰国した。リースクールで学ぶものは、字面の教育方針や教育方法ではなく、そこに生きている人間の生きざまそのもの。彼らの分厚い経験は、ほんとに宝の山だ。このプログラム以外にも、児島一裕さん（地球学校）が毎年リースクール大会を含めて約二カ月間の「旅の学校」（アメリカのリースクール見て歩き）も企画しているし、行きたいスクールが定まっていれば直接コンタクトをとってみ

れば即OKのケースもある。自分に合ったホスト・スクール探しや向こうで慣れるまでの期間に、あるいは一年間にわたって、きめの細かいガイドがあったほうが自分には安心、という人にとっては、このプログラムが適しているかもしれない。(わざわざ海を越えずとも、日本にも面白い人がたくさんいるけれど)。

詳しい案内は左記まで。

Sandra M. Hurst, Director, TEACHER EDUCATION PROGRAM  
Upatinas School 429 Greenridge Rd., Glenmore, PA  
19343 U.S.A.

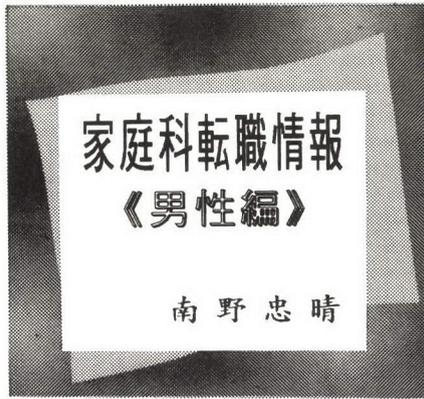
ちょうど上に述べたパットおばさんの「クロンララ・スクール」と「東京シユレ」との交流が今春から始まっている。この夏には、グラスルーツ・フリースクールのパット・シエアリーが来日して、日本のフリースクールに関わる人たちが大いに励まされたところだ。また、名古屋の「野並子ども村」や大阪の「なわて遊学場」などでは、行政に対して公的助成を求める動きをはじめた。背景の違いは違いついて、アメリカでの経験から学べるところは学んでみたい。



副教材にいかがですか

■『共にく見る、知る、考える。在日韓国・朝鮮人と私たち』(企画・神奈川県渉外部国際交流課/明石書店/A5判/一〇四頁/八〇〇円) 朝鮮人であることを隠さずに生きたいと思った高校生のバク・ナミさんの思い、悩みを通して、在日韓国・朝鮮の人たちの置かれた状況や問題が理解できるように構成されている。民族文化や風俗習慣、歴史も、豊富なイラストや資料を使って紹介されており、中・高校生にも読みやすい入門書となっています。

■『在日韓国・朝鮮人を理解するためのハンドブック』日本人と在日韓国・朝鮮人が同じ市民として生きることの意味を考えるために』(川崎市市民局国際室発行/連絡先〒二一〇 川崎市川崎区宮本町1番地 ☎〇四四一 二〇〇一三三二五) 町の歴史や指紋押捺問題などの資料、在日三世の人たちの座談会など、地域に密着した内容で、在日韓国・朝鮮の人たちの存在感を感じます。



七月二十二日、家庭科研究会のブロック会で、兵庫県尼崎市にある特別養護老人ホーム「喜楽苑」を訪れた。僕にとつては二度目の訪問になるけど、

いうと、ノーマライゼーションに取り組んでいる老人ホームだからだ。そもそも、特別養護老人ホームに入所するには、「自分で身のまわりの世話ができなくならなければならぬ。面倒を見てくれる身内がいなくならなければならぬ」となっていて、けっこうハードルが高い。そのうえ、ここで生活しているお年寄り五十人のうち、軽度の人も含めると、八十%が痴呆症だというから、施設を運営するのはとても大変な事だ。

ノーマライゼーションには適当な訳語がまだない。「喜楽苑」では「市民的自由の保証」という説明を行っている。そして、酒、煙草、外出、外泊、荷物の持ち込み、電話を引くこと、給食をやめて出前をとること、等々、可能な限りの自由を保証している。

「施設に余裕があっても美容室は作ら

ないでおこうと思います。近くのお店に髪を切りに行ってもらう方が、地域の人たちと触れ合いを持てるからです」  
そんな事を言いながら、一緒に、午後には喫茶店、夕方には居酒屋へと繰り出すそうだ。ここに来てから日常生活活動が良くなる人が多いという。

僕の意識の中に、「老人ホームなら制約があっても当たり前じゃないか」という思い込みがあった。特別の施設だから、特別に扱われても当然だ、という意識だ。これは僕の中の「学校」という言葉にも染みついている。「あの程度は生徒に我慢させても仕方ないんじゃないか」というわけだ。

「喜楽苑」のお年寄りの表情は明るかった。でも、何よりも印象に残ったのは、職員やボランティアの人たちの顔が、自信にあふれ、喜びに満ちていたことだ。すごく光っていた。

やっぱりスゴイところだった。

「喜楽苑」はマスコミでも取り上げられてすっかり有名だから、知っている人も多いかもしれない。何で有名かと

「臓器移植」の性急な立法化に反対する会に賛同したことで、脳死と臓器移植について、「一般論」ではなく当事者としての本音に立ち戻ってみる必要を感じました。

私は人の臓器を貰ってまで生き延びたくはない。愛する者が死に直面した時は、息を引き取り、温かな五体が次第に冷たくなっていく死のプロセスをみとりたい。私自身もそうされたい。それが生まれて生きて死んでゆく者への作法というもの。だが、もしも余命いくばくもない我が子が移植で助かると言われたら、もしも脳死の宣告と同時に「人の命があなたの決断にかかっている」と臓器提供の説得をされたら、断る自信があるだろうか。

そんな折りテレビで、中絶した胎児の卵細胞を利用して人工受精の研究が進められているのを見ました。中絶された胎児を母親として生まれてくる子ども！の不気味さよりも、「無駄になるものの再利用だ」と言いきる医師の言葉に吐き気に似たショックを感じました。でも、脳死による臓器移植もそれと同じことですよ。

結局、もうこれ以上神の領域を侵すのはよそうよ、と泣きごとのような結論しかでないのです。(K・S)

実家のある金沢は、一向一揆の歴史もあり、わりと熱

心な浄土真宗の信者が多い。しかし恥ずかしいことには、先日父を亡くして、改めて僕たち一家は仏教についてのイロハも知らない不信心な一族であることに気がついた。葬式のあと、近所の坊さんをかこんで、遺骨はどこにあげばいいかとか、線香は何本立てるのが正式かとか、精進はいつまでするものか等と、われながら内心あきれほどもことに愚にもつかぬ質問を連発したのである。

さすがに僧たるひとは、少しも僕たちに恥ずかしい思いをさせずに「仏教世界には自分の心のなかで決めて自分で守る『戒』と、みんなで決めてみんなで守る『律』があるだけで、儀式をどんなふうに行うとかまわらないですよ」などと、もつともな示唆を与えてくれた。

医者をしている弟が勢いにのって「脳死状態からの臓器移植をどう思われますか」と、彼の僧に迫った。みんなが息を殺して聞き耳をたてているなかで、彼はこう言った。「誰かが決めることではなくて(臓器を)あげたいひとと貰いたいひとの心の問題ではないでしょうか」。僕はなんとなく腑に落ちたのであった。(T・M)

## 四

## 人

木村 崇  
津田正夫

# 冗

# 語

野村康子  
武田秀夫

臓器移植に関しては、とにかく、立法化されようとしていますが、体外受精や代理母など、いわゆる人工生殖の方は事実のみが先行、法規制の気運は全くありません。これは、産むことは所詮女の問題である、と思われているからではないでしょうか。で、私は、どちらかという人工生殖の問題に強く拘っています。

六十代のイギリス女性が夫の精子と他の女性との受精卵を自分の子宮に戻し出産したというニュースを読んだことがあります。また、アメリカでは、レズビアンが精子バンクから精子を買って、人工受精で産んだ子どもを育てている例が少なからずあると聞きます。

医療技術の輝かしい成果と手放して喜べない気がします。が、不妊治療としての人工生殖をすべてノンと言いつけるにはためらいがあります。でも、線引きするのものがく難しい（諸外国ではそれなりの基準がありますが）。高齢者や同性愛者の子どもを産む権利をいっただう考えたらいいのでしょうか。

コウノトリのご機嫌にまかせていた時代は楽だったなあ……後向きのご感想しか言えず情けないです。（N・Y）

『セイレーンの誘惑——漱石と賢治』（現代書館）という本を上梓しました。何がそこに実現されているのか自分でもよくわからないような本で、私は今ちよつとした「恍惚と不安」の中にあるのですが、一つだけはつきりしているかなと思うのは、「みんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない」（『銀河鉄道の夜』）といったことをくりかえし作品の中で述べた賢治の、どうにも抵抗しようのない（正しさ）に、どうしたら否を言えるか、なんとしても否を言いたいという私の思いです。賢治は、童話『山男の四月』の中で、「おれのからだなどは、支那人が六十銭まうけて宿屋に行つて、鯛の頭や菜っ葉汁をたべるかはりにくれてやらう」とも言っています。

今、脳死・臓器移植を推進しようとする人々のなかに抵抗しにくい（正しさ）の奥に、宿痾のごとき自己処罰の衝動にとらえられた賢治のこうした叫びが、遠く反響していないか。「わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまいません」という賢治の言葉に私たちはいたずらに怯えてはなるまいと思います。（T・H）

こうちゃんは人生の大部分を家族と別れて病院で過ごしてきた。あまりにも純粹で素直すぎたこうちゃんは、社会の荒波の中で生きることができず、神様は「心の病氣」というプレセントを下さった。こうちゃんの時間は中学校の時からストップしたままだった。

そんなこうちゃんのところへ、ある日突然、病魔が訪れた。胃癌であった。

このため、こうちゃんは三十年近く住み慣れた病院を後にすることになった。

こうして、こうちゃんはうちの病院にくることになったのであるが、実のところ、最初はこうちゃんの転院について、家族も私達も、とても悩んだ。

「住み慣れた病院を離れて、慣れない病院で過ごすことは、こうちゃんにとって不幸なのでは？」

しかし、

「今までそばにいてやれなかった分、せめてわずかな間でも浩二のそばにいてやりたい。この病院なら、毎日来てやれるから」

## 「ホスピス」 千夜一夜物語

森津純子

という、ご家族のたつての希望で、こうちゃんはこの病院で残された時間を過ごすことになった。

八十歳になるこうちゃんのお母さんは、約束どおり、雨の日も風の日も、不自由な足を引きずりながら、毎日こうちゃんのもとへ通ってきた。

するとどうだろう。それまで心を閉ざして、一日中、ただベットの上でじっとしているだけで何もしやべらなかつたこうちゃんが、少しずつ言葉を話しだったのである。以来、こうちゃんの日課は、朝起きるとまず、看護婦さんに「お母さん、来る？」と聞くことから始まるようになった。

「なんか、うまいもんが食べたい」

「大きくなったら、英語の先生になるんだ」

「散歩に連れてって」

「あんばん、ちようだい」

こうちゃんの言葉は少しずつ増えていった。

そんなある日、看護婦さんが見回りに行ってみると、こうちゃん

のベットはもぬけのからになって  
いた。

「こうちゃんは一人では歩けない  
はずなのに！」

慌てる看護婦さんを尻目に、こ  
うちゃんはゆうゆうと窓辺にたた  
ずみ、夕日に向かってモグモグと  
バナナをおいしそうにほおばって

いた。どうやら、ベット柵を乗り越えて抜け出したらしい。皆、苦笑しながらも、元気に生き生きと過ごせるようになったこうちゃんの姿を喜んだ。

そんなこうちゃんの体がいよいよ弱ってきた時、こう  
ちゃんのお母さんはこうちゃんにこう言っただけで聞かせた。

「子供のほうが親より先に逝くことは親にとっては  
やるせねえことだども、お前を残して母ちゃんが先に逝  
くのは忍びねえ。浩二、もうじき仏様が迎えに来るすけ、  
安心してれーや。ちつとも怖いことなんかねえらよ。母  
さんもすぐ、浩二の後を追って逝くすけ、待ってろや」  
こうちゃんは、ただただ、うえーんと泣くばかりだ  
た。



こうしてこうちゃんは逝った。  
冷たくなったその骸を見つめなが  
ら、こうちゃんのお兄さんはポツ  
リとこう言った。  
「浩二には、病気になってこの  
病院に来ることになって、ようや  
つと家族らしいことをしてやれた。  
これは、あいつにとつて、形のち  
よつとかわつた親孝行だったんでねえだろうか」  
私は思った。

「こうちゃんにとつては病気は必ずしも不幸なことでは  
なかつたんじゃないだろうか。もしかして、この病院  
で家族に囲まれて過ごした時間は、こうちゃんの今まで  
の人生の中で一番幸せな時だったんじゃないだろうか」

こうちゃんの声が今でも私の耳にこだまする。  
「お母さんは……？」

## 共通の知識と体験が生まれて

大阪府立少路高等学校  
南野忠晴

### ■はじめに

四月から家庭科の授業を始めてみて、なるほど、英語をやつてよりオモシロイ。でも、まだまだ物足りない。授業が一方通行なんだ。生徒たちは自分から進んでは、あんまりしゃべってくれない。意見を求めて指名すると、だいたいの生徒は何か言ってくれただけで、盛り上がらない。僕は、知識の切り売りなら得意中の得意だけれど、それがとつても退屈だから家庭科にやつてきたのに、これじゃ何も変わらない。何とかならないの、と考えて、家庭科の資料集をバラバラめくっているうちに、「そうだ、グループ研究ができるんじゃない」と思いついたというわけなんだ。幸い、同僚の方も賛成して

くれたので、あまりはつきりした目的意識もなく、準備もなしでやつちやいました。ごめんなさいね、いい加減で。でも、一学期の中では一番楽しい授業になった。

### ■研究テーマ

一学期は食生活ということで、調理実習も各クラス二度ずつ組んである。調理実習は男子二人女子三人、または、男子三人女子二人の五人で一班にしてあるので、その同じグループで研究発表してもらうことにした。全部で八班あるので、八つのテーマを決めた。『カレント家庭科資料』（一橋出版）の食生活の範囲から八つのテーマを拾い、各班に割り当てる。最悪の場合でも、各班はカレント資料集の内容を発表すれば良いということだ。

家  
庭  
科  
遊  
ゆ  
惑  
あ  
う  
く

一時間目に配ったプリントは次のようなものだった。

### ☆家庭科一年食生活グループ研究

食生活の問題点を自分たちの視点で考えてもらうためにグループ研究をし、教室で発表してもらいます。教科書、資料集、参考図書、新聞記事などを各グループで調べたり、身近な人たちにインタビューするなどして、自分たちで集めた資料をもとに発表の計画を練って下さい。グループは調理実習の班、発表時間は各グループ十五分間とします。模造紙を使つての発表やプリントを作つての発表など、教室の他の人たちに問題点がはっきりと伝わるように各自工夫して下さい。

### ☆各グループのテーマ(資料集のテーマを基本に割り当てます)

- 1班 食料の輸入とポストハーベスト(食料自給率の低さを考える)
- 2班 エビと日本人(第三世界の人々の暮らしと自然破壊とのつながり)
- 3班 肉と魚(動物性たんぱく質のとり方を考える)
- 4班 加工食品と食品添加物(実態と問題点を探る)

5班 清涼飲料水(危険性や自動販売機の電気代、クラスの実態などに迫ろう)

6班 ファースト・フード(栄養面から考える)

7班 両親や祖父母が小さいとき食べていたものは何か(伝統食を見直す)

8班 安全で健康な食べ物とは(消費者としてできることを考える)

### ☆発表時の注意

- 1 割り当ての十五分を有効に使つて意味のある発表にすること
- 2 テーマを絞り、わかりやすいものになるよう工夫すること
- 3 グループの全員が参加し、協力し合つて準備、発表を行うこと(発表の時も分担して全員が話をできるようにしなさい)
- 4 クラスのみんなに問題点を伝え、それぞれの生活の向上に役だつて欲しいという情熱を持つて研究発表を行うこと
- 5 聞く側はきちんとした態度で聞き、わからないところなどは積極的に質問すること

6 聞きながら発表の評価をしてもらいます。まじめな態度で記入すること

このプリントを配って、ざっと発表の要領を説明し、カレント資料集を見ながら、それぞれの項目についてのこちらの問題意識を伝えた。まあ、とっかかりのヒントにでもなればということだ。それが三十分ぐらい。その後、各班に分かれる。次の時間に発表の準備をしてもらうと伝え、それまでに各自で調べたり用意しておいたりするものを決めるためだ。(これは顔合わせのようなもので実質的にはあまり意味はない。でも、さあ、やるぞ！ になってもうらうらうためには貴重な時間だと思う)。

二時間目は準備の時間だ。模造紙を持ってきて何かや始める班もあるけど、たいていの班は「何やったらええのん？」の世界だ。ありあわせの本が各班に一冊ずつぐらい行き渡りそうだったので、「こんなんどう？」と言いながら配って歩き、各班ごとにテーマや内容を決める相談に乗る。

「わからん」とか「難しすぎる」とか言う声を聞きながら、「この時間にアンケートをとってる班もあつたよ。」

『エビ好きですか』とか『清涼飲料水はよく飲みますか』とかやつてた。クラスのみんなの役に立つための発表なんやから、クラスの人たちのことを調べるのが一番いいと思うし、けっこう面白そうやったよ』などと言っているうちに、「僕らもアンケートとろ」「みんなでマクドに食べに行こ」などと方向が少しづつ見えてくる。盛り上がりかけたところで非情のチャイム。とても一時間じや足りない。

「残りは勝手に各班で時間を見つけてやってちょうだい」と言い置いて、僕は教室を後にする。

#### ■発表

準備に二時間かけて、発表には三時間かかる。傾向として、最初の発表班よりも、後の方が良くなっている。時間があつたからというよりは、へたな発表を聞いて要領を学習した、と言うのが正しいようだ。みんな研究発表というものにあまりにも慣れていないのだ。でも、ひとの発表をちよつと見ただけで、こんなに発表のやり方が向上するなら、この人たち随分見込みがあるんじゃない、ということでもある。生徒に絶望する前に、まだまだやれることがあるということだ。

僕は、一年生を七クラス担当しているけど、発表の内容はクラスによって随分と違った。実際の発表を聞くまでは、一班から八班まで、テーマによって調べやすさや発表のしやすさにかなり差があるかな、と内心では考えていたけれど、それは間違いだった。テーマの違いよりも班の人たちのやる気の違い、面白いと感じているかどうかなどによって差が出てきただけだった。どのテーマに關しても興味深い発表が聞けた。

発表の形態としては、ほとんどの班が一枚から四枚ぐらいまでの模造紙を使い、カラフルに、わかりやすくするように工夫していた（ちなみに、この研究発表の授業は、急な思いつきだったので予算が全くなかった。したがって、模造紙等は各班の自己負担、ごめんね、とは言ったもののみなほとんど文句も言わずにやってくれた。ただただ感謝あるのみ）。プリントを使った班も多かったが、手書き、コピーにかかわらず、情報量が多すぎて、十五分間では話についてゆけない感じになった。B4のプリント一〜二枚は十五分もあれば読めるかもしれない。でも、他に話もあるし、新しい情報を頭の中で考えて消化するための時間も必要となれば、聞き手に残るのは疲

労感と混乱だけだ（これは僕の反省には大いに役だった。いつもプリントを配りすぎていたのが実感できた）。

その他、オリジナルの紙芝居をした班、ペーパーサートをした班、プリントをワープロで仕上げた八ページの小さな冊子にまとめた班、すいとんを作ってきて何人かに食べさせた班（おいしかったよ）、クイズ形式で教室の生徒たちとやり取りをしながら発表した班などがあつた。

発表の内容としてはいろいろあつたが、本で調べてきたものを単に読んでいるだけのようなのは評判が悪く、少なくとも、自分の言葉で、自分が感じたことをしゃべっている人に関しては、みんなが一生懸命聞こうとしていた。アンケートも評判が良く、中には清涼飲料を一週間に二十本も飲むという生徒もいて、発表者は、「できるだけ減らして下さいね」と訴えかけ、その生徒が誰なのかはわからないのだけれど、教室の中は、そのメッセージが確実に伝わったようなムードになった。僕が同じ調査をし、同じ事を訴えるよりも、はるかに意義深い時間が持てたような気がする。他にも、ファーストフード店のメニューを用意し、クラスの人に注文してもらい、それが何カロリーになるか、などとやっていた班もある。

「もし食べるならこのメニュー」というのを考えてくれた班もあった。他にも、道行く人にアンケートをとったり、近くのマクドナルドの店に行つて店員やお客にアンケートしてきた班もある。

沖縄出身の生徒が、沖縄の長寿と沖縄の伝統食に関して報告していたことも印象深い。各地の伝統食や祖母の時代の料理などを聞いてきて作り方を教えてくれた班もいくつかあった。手作りのアイスクリーム・みそ・梅干しなどの作り方を書いて、プリントで配つてくれた班もたくさんあった。ほとんどの班が図書館などに行つたりして最低限の内容はおさえていて、「これはちよつとあまりにもひどいな。こちらで訂正しなければ」というまでに至つた班はなかった（ああ、よかった）。

### ■評価

発表を聞きながら評価用紙で採点をしてもらった。評価用紙は、別紙のようなもので、六つの項目で一点から五点、合計得点が六点から三十点になるようになっていて、簡単なコメントを書くようにしてある。これは、基本的にはしっかり聞いてもらうための措置であり、生徒にも、発表している班の採点をしてもらうと同時に、熱

グループ発表評価用紙

第 班	発表の態度	良5 4 3 2 1悪	わかりやすさ	良5 4 3 2 1悪
	調査内容	5 4 3 2 1	熱意	5 4 3 2 1
	工夫度	5 4 3 2 1	協力度	5 4 3 2 1
印象に残った所		工夫して欲しかった所		合計 点

第 班	発表の態度	良5 4 3 2 1悪	わかりやすさ	良5 4 3 2 1悪
	調査内容	5 4 3 2 1	熱意	5 4 3 2 1
	工夫度	5 4 3 2 1	協力度	5 4 3 2 1
印象に残った所		工夫して欲しかった所		合計 点

第 班	発表の態度	良5 4 3 2 1悪	わかりやすさ	良5 4 3 2 1悪
	調査内容	5 4 3 2 1	熱意	5 4 3 2 1
	工夫度	5 4 3 2 1	協力度	5 4 3 2 1
印象に残った所		工夫して欲しかった所		合計 点

記入者 姓 名 氏 名

心に聞いているかどうかを僕がチェックするための紙でもあると言つて配布した。僕も同じ紙で採点し、生徒がつけた点数と僕がつけた点数を五分五分で平均してグループ発表の各班の点数とした。このやり方が良かったかどうかはさっぱりわからないが、大半の生徒は随分とていねいに採点してくれていた。責任を持つて点数をつけなくてはと覚えてくれたみたいだ。

## ■授業を終えて

家庭料の授業は各自の暮らしに直結しないと意味がない、少なくとも、生徒が自分の問題として捉えることができるところを取り上げよう、そう考えてきた。そういう意味では、今回のやり方は良かったのではないかと思う。できれば一つ一つのテーマに関して、発表の後、討論する時間がたっぷり取れたらもつといいと思う。でも、今回考えたことは、受け身の授業から、参加する授業への転換だ。内容の充実度に関してはあまり問わない気持ちでいた。そして、それが良かったように思う。

「せめてこの程度は」とか「もう少し何とかならないの」という気持ちとは遠いところで生徒たちの発表を聞くことができた。「がんばったな」「よくやるなあ」という気持ちで、「人前でしゃべることに緊張し、震えている生徒たち」を見守ることができた。たぶん僕は笑顔で発表を聞いていたんじゃないかと思う。

自分たちの班で調べたことは印象深かったのだろう。発表が終わった後、食品添加物や、加工食品、清涼飲料水などについて個人的に意見を言ってくる生徒が何人かいた。あるいは、この事をきっかけに家庭で食べ物の話

をするようになったと言っている生徒もいた。班によっては人間関係が悪化したところもあるようだが、多くの班が今回の研究発表とその準備を通じてとても仲良くなつていったのが目に見えて明らかだった。彼らの中には、自分たちだけの共通の知識ができ、共通の体験が生まれた。五人という小さな社会だけれど、意見の違いに折り合いをつけ、何とか発表という形にまとめ上げるのは大変な苦労だ。本当に良くやったと思う。

また、彼らは自信もつけた。「清涼飲料水の事なら何でも訊いてくれ（半分冗談、半分本気）」と豪語する人物も現れた。「エビと自分たちの暮らしについて、難しいけど考えていかなあかんことやと思う」と友達に話していた生徒もいた。全員がというわけには全然いかなかったが、自分の問題として何かが心に落ちた生徒はたくさんいたように思う。同じ資料集とプリントなどを使って五時間かけて僕が同じ範囲の授業をしたらどうだっただろう。もつというんな事を話したかもしれないが、何も彼らの心には落ちなかつたかもしれない。意味のある学習とは、自分で発見する事からしか始まらないのだということを確認する授業になった。

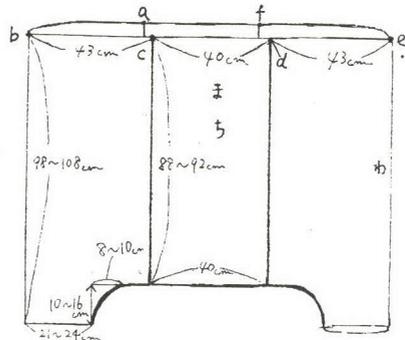
でしょうね。朝食は、このチーズとオリーブとトマトときゅうり、フランスパンとチャイ（紅茶）というのが定番でした。

赤レンジ豆のスープにいんげん豆のトマトソース煮、羊のひき肉のハンバーグ(キョフテ)、ピーマンのピラフ詰め、ナスにひき肉、トマトをのせて焼いたムサカ、ああ、もうおいしいものがいっぱい書ききれない。

### 〈トルコのパンツ シャルワール〉

イスタンブールのような都会ではスカーフをはずした女性も多いが、少し田舎にいくと、ロングコートを着て、頭をスカーフでおおったスタイルや、ブラウスとロングスカートとスカーフというスタイルの女性が多い。なかには、目だけを出している黒ずくめの衣装の人がいて、ちょっとびっくり。(でも、チラッとみえた黒い服の中には、カラフルな服を着ているのです。)

そして、トルコ中部、カッパドキア地方に行くと、シャルワールをはいている女性がたくさん。今まで、本でしか見たことがなかったので、本当にシャルワールを生活着として身につけている人たちに



4枚の布を縫い合わせる。(太線部分)

裾は3つ折縫い、ウエストも3つ折縫いをしてゴムを通す。

会って、感激しました。ここで数日過ごしていると、シャルワールは、暑さ、日射し、砂ぼこりから身を守ることができ、ロバにもラクラクまたがることのできる優れものだということが、よくわかりました。日射しの強い所では、半袖、短パンよりも、むしろ、長袖の方が涼しいのです。それに機能性だけでなく、柔らかい素材を使えば、ドレープがきれいで、ドレスシー。柄もチェックあり、花柄ありで、なかなかオシャレですてきでしたヨ。

おみやげ屋さんで買ってきましたので、実物を見たい人は連絡して下さい。でも、地元の人には、たいてい、自分でつくるのだそうです。作り方はとても簡単なので、ぜひ一着、作ってみて下さい。



## 家庭科玉手箱 …… 浅井由利子

夏休みにトルコに行ってきました。皆さん、トルコっていうと、どんなイメージ？ アジアとヨーロッパの架け橋、イスラム教の国、親日的な人たち……。今回は、トルコの料理と女性のファッションについて報告します。

### 〈トルコ料理〉

旅をすると、食べることは一番の楽しみ。いろいろ食べてみましたが、トルコ料理という、やはりシシ・ケバブ（羊の角切とトマト、青唐辛子の串焼き）かな。町でよくみかけたのは、ドネル・ケバブです。これは羊の薄切肉をミルク、スパイスに漬け、まっすぐに立てた鉄串に巻きつけていき、それを炭火であぶっているもの。その肉のかたまりを長いナイフで削って、ちりとりのようなもので受けるというのがユニーク！ サンドイッチにして食べたり、お皿に小さく切ったパンをのせ、その上にドネル・ケバブを150g～200gほどドサッと盛り付け、そして、トマトソースかヨーグルトソースをたっぷりかけて食べます。安くておいしい庶民の味。イスラム教の信者99%という国だから、豚肉は食べない。羊肉以外に鶏肉や牛肉は食べるけれど、エーゲ海や地中海の近くでも、トルコの人は魚はなぜかほとんど食べないようです。

味つけの基本はトマトとオリーブ油で南欧料理風だが、それにプラスして、日本のししとうをもっと大きくした青唐辛子やパセリに似た香菜をよく使い、さらに、何種類ものスパイスをたくみに使ってピリッとした奥深い味だ。だから、マトンのくさみも全然なくて、おいしいのです。

それから、チーズ。見た目は豆腐のようで、やわらかくて塩辛い。暑いトルコで保存に耐えるチーズとして、この塩辛チーズが必要だったの

	共
学	
	家
庭	
	科
の	
	窓

石川尚子

## 一 OHPを利用した授業

### (1) OHPの特徴

OHPは、説明者の背後にあるスクリーンに拡大した映像を映し出す投影装置である。教室での授業はもちろん、学芸発表や講演会などでもよく利用されているが、学習指導法としてのOHPには、次のような利点がある。

- ① 使い方が簡単で、子どもたちでも操作できる。
- ② 暗幕を使用しなくても明瞭な映像を見ることができ。
- ③ 教師は子どもたちと対面しながら映像の説明ができる。
- ④ 提示しつつ新しく書き込んだり、消去したり、授業の進め方に応じて自由自在に展開できる。
- ⑤ 指示棒を使って必要な部分を示しながら説明できる。

- ⑥ ステージ上で物を動かしながら説明することができる。
- ⑦ 携帯用のOHPもあり、電源とスクリーン（壁などでもよい）さえあれば、どこでも使うことができる。

### (2) TPPのつくり方

OHPに投影する資料としては、透明なフィルムに文字や図などを書いたものを用いるが、これをOHP用フィルムあるいはトランスペアレンシーフィルム (Transparent Film 以下TPF) とする。

TPFの必要最小限の条件は、透明であることと、何等かの方法で文字や図が書けることである。最も一般的なTPFは、無色透明な厚さ0・1mm程度のポリエステル製のものであるが、カラーのTPF（黄、赤、青、緑など）や方眼紙のTPFもある。これらに、OHP用ペン（トラペン）を用いて書きさす手書き法、コピー機でコピーする複写法、ワープロやコンピュータでプリントアウトするプリント法などによって、文字、絵、図表などをシート上に書き込んで必要なTPFをつくることができる。

### (3) 家庭科のTPF

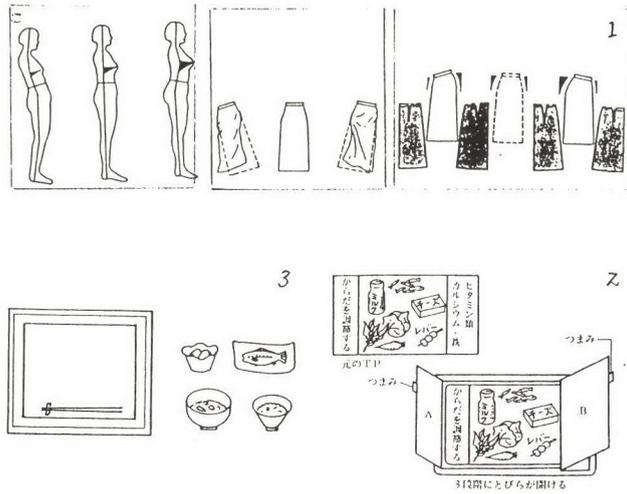
家庭科の授業では視覚に訴える教具が有効であることを以前に述べたが、OHPの使用も同様な理由によって効果

的な方法といえよう。必要に応じて教師が手づくりしたり、子どもたちが調べたことをまとめて書いたり、さまざまな資料を用いてコピーしたり幅広く活用できる。

特にカラーの鮮やかなTPは、子どもたちの心をつかみややすく、食品・料理・食器、デザイン・衣裳、住居・家具など、私自身も数多くのカラーTPを作成し利用している。TPシートにカラーコピーするためには、カラーコピー機を用いて自分自身でつくることができれば、富士ゼロックスなど町のコピー屋で作成してもらうことも可能である。ただし一枚千円程度と高価で、予算上の難点もあるが半永久的に利用できるというメリットもある。単行本や雑誌、パンフレットや絵画などをとくにTPをカラーでつくることをおすすめしたい。

また、子どもたちや先生の手づくりTPも学習にはずみをつけるであろう。つぎに示したイラスト1は、TP同士を重ねることで理解を深めるオーバレイ法の例で、3つの体系に合わせたスカートの型紙づくりを示している。イラスト2は、TPの一部を隠したり全体を見せたりする全体部分提示法の例で、栄養と食品を理解するためのものである。イラスト3は、小物を用いてものの配置などを学習

する具体物置換法の例、ここでは配膳の理解に用いている。これらはOHP教材のほんの一例であるが、教師と子どもたちが合作したTPを随所に活用しつつ、創意工夫ある授業を作り上げられたらと思っている。



# 木を植えた日

—故郷

蒔田直子  
カット／吉村美加

夏期休暇が近づくと、私がお仕事している寮の学生たちが、今年はどこ行くんですかアと聞きに来る。「お金もないし今年は冒険旅行はあきらめる。ヨメとムスメの役でこの夏は手いっぱい」。私はいばって宣言した。お金がないってことだけが本当ですねえ、と学生たちはニヤニヤしている。

その一、つれの朴<sup>ク</sup>さんちの墓参で済州島に行く。その二、父親が入院しているから静岡で看病。当然の務めでしょうが……。

「30代の肉体」を誇り、タバコ一日3箱、酒は毎夜底なしだった父が、なぜか右手がきかなくなり、このままでは半身不随になるかもしれないといわれた。腰骨を削って傷んでいる頸椎につき合わせる大手術を決行したのがこの5月だった。ひどい、エンマさんのおしおきだ。術後の姿を見て私は叫んでしまった。頸椎を固定するために頭蓋骨に4カ所穴をあけ金属の輪がはめこんである。その輪から4本の棒がプラスチックのベストにつながり、ロボコップかターミネーターのよう。今までやりたい放題の人間が、そういう非人間的に固定された姿で3カ月も過ごすことになるかどうか。一刻も早く母上の手助けを……。とはいっても、実際に私が役に立ったのは5月に京都と静岡を往復していた一時期だけで、退院間近の8月は新たなお荷物になっ

ただけ。だらけきっているのは誰の目にも明らかで、沙羅からも「砂浜にうち上げられたクラゲみたいだねえ」と言われてしまう。「静岡に来ると、あの人ホントの子どもになるんだヨ」と近所の子に言っているのも聞いた。

この町には過去の記憶もかぶさっていて、遊び人だった祖父が、キンタマでくるんで寝てやるぞオと寝物語に話してくれた『安倍川橋の化けギツネ』や、『お堀のヒトタマ』を、祖父と同じ迫真の口調で子どもたちに話してしまう。目の前の10歳と6歳の沙羅と希沙が自分なのか誰なのか、クラゲ状態の脳ミソはもはや判別不能……。つまり静岡というのは私の故郷らしい。なんと屈託のない幸福な「故郷」。

「『故郷』やな……ルントウや。こいつら今日のできごとが記憶の底に残る

な」。静岡に来る一週間前、済州島で草刈りを終えた夕方、海岸で遊ぶ沙羅と希沙を見ながら酔っぱらったバクさんが言った。ルントウ？ ああ、魯迅の『故郷』か。確かに今日ルントウを見たなど、私も酔って夢のように思う。

少年は月光ではなくキラキラ光る太陽を背に、スイカ畑にカマを持ってすつくと立っていた。火山岩の山道をヨタヨタ行く私たちのずつと先を、彼は飛ぶように歩いて振り返る。汗だくでたどりついた草ぼうぼうの墓所を前に、山の畑から細長いスイカをカマで魔法のように切り分けて、ほらとさし出した。少年は胸板が厚くずんぐりして、朝鮮ずもうのシルムをやらせたらどんなに強いだろう。「走石飛沙」、石が走り砂が飛び、風が吹きまくる済州島の山あいでは牧畜と畑をしているのでも

の。手を切るからとカマを持たせてもらえなかつた沙羅と希沙は、少年がナイフのように大カマをあやつつてすいかを割り、次はまくわうりをひき抜いて皮をむくのを畏敬の目でじつと見つめている。横顔を見ていると、似ているような気もする。「親戚」だとい



て、五代前の誰それ、その息子の、と何キロ四方にわたるのか、皆さん好きな場所を選んだのはよいけれど、ツルがからまり夏草が存分に伸び、墓へ行きつくまでにイバラの道を切り拓かなければならない。先頭を草薙機の勇姿で行くのは、骨格の造りから違う済州

のだから。なんと不思議なこと……。  
朴一族の墓は漢<sup>ハル</sup>拳山の北側の麗、朝天<sup>ハル</sup>のあちこちに散在している。先祖代々の、というんではなく一人に一つ、土盛りの古墳のような墓が草に埋もれている。七代前のおじいさんに始まっ

の縁者たち。20数人の在日組は、炎天下に足もともふらつき、果てしない草との格闘にあえぐばかり。あんなにはりきっていたのに三つめの墓ではほぼ全滅。墓ごとに礼をして祭祀の食べ物が出るが、吐きそうでも喉を通らな

い。兄貴たちはと振り向けば、墓の上にへたりこんだまま、以後これらの墓守りはどうするのか、息子の代には所  
在もわからなくなるに違いないと、い  
つもの果てしない議論が始まっている。

数年前まで一族揃って墓参などとは  
誰も言い出さなかった。この話がワー  
ツと盛り上って決まってしまったのは  
お正月の酒の席で、「夏は暑い」とい  
うことを忘れている。祭祀は中秋の名  
月の頃にするんでしょ、一番暑くて高  
くて混んでいるお盆に山のお墓の草苳  
りなんて……と言いたかったがのみこ  
んだ。兄貴たちをかりたてている熱情  
の中に、息子の代には濟州島との糸が  
切れるという恐怖と諦めがあるのは私  
にもわかった。

草を苳っていると、焼き払われた朝  
天の村の火山岩の下に無数の死体があ  
ることを思ってしまう。島全体が漢卑ハルラ

山を中心にひとつの墓だという幻覚が、  
汗と一緒に吹き出してくる。

濟州島という島の名を「四・三事件」  
とともに知ったのは20年前。すごい小  
説を読んだと、友人が夜中に興奮して  
訪ねてきた。持ってきたのは金石範の  
『鴉カラスの死』。朝鮮戦争前夜の一九四八  
年、アメリカ軍と「陸地」から送りこ  
まれた武装集団が、パルチザンを出し  
た村々を焼き払って、島民の三人に一  
人を虐殺した。ベトナム戦争のソンミ  
村のように、光州での虐殺のように、  
人間が手をくだすことのできる残虐を  
尽くして、七万とも八万ともいわれる  
死者……。

朴さんのオモ二とアボジは日本の敗  
戦後すぐに濟州島に帰っている。一番  
上の兄さんが当時20才だった。帰りつ  
いた島で、パルチザンの協力者とみな

され連行されて、処刑の寸前にオモ二  
が救い出したと聞いている。二番めの  
兄さんも小学校の校庭で機銃掃射の銃  
の前に立ったということ……なぜ助か  
ったのか。誰も話さない。私は聞けな  
い。四人の姉のうち二人は島に残った。  
どのように別れたのか、どんな手だて  
をつくして日本へ逃れてきたのか。オ  
モ二もアボジも沈黙のうちに亡くなっ  
た。日本へ逃れてから10人めの息子が  
生まれた。私のつれあいのバクさんだ。  
この賑やかな家族は、第二次世界大戦  
後の世界で、虐殺を逃れて小船に乗り  
こみ、海へこぎ出していった最初の人  
たちだった。

草刈りと酒宴でふらふらになった旅  
行から帰り、私はバクさんの古い外国  
人登録証をもう一度ひっぱり出して見  
た。「本籍地」は確かに濟州道、朝天  
面朝天里と書かれていた。

「お宅のクラスだらしないよ！」

今年、オホーツク海沿いの街もそれなりの猛暑、残暑の日々が続いて、彼女達もやや元気を失い、のびていきます。休み時間には、わずかに涼しい廊下の床にみんなでベタツと座りこみまです。教室の暑さを思うと、私は納得できるのですが、「廊下の座りこみ」はだらしなく、みつともないことになっており、指導の対象となっています。

学校全体では、指導が行き届いているので、派手に座りこみをしているのは私のクラスだけのようです。

遅刻も相変わらず多く、「だらしない」クラスと見られています。

先日、私のクラスで、冬服の準備期間でもないにも関わらず、7名の生徒が冬セーラーを着て登校したことを他の先生より注意されました。



江口凡太郎

変形制服はともかく、制服を着ているのだから、全く問題ないと私は思っていましたし、一人は、夏服を盗まれて、しかたなく着ている子もいました。私は、この規定に納得できないと言いました。なぜなら、男子は、冬は詰襟、夏は、詰め襟でも、白の開襟シャツでもどちらでもいいのです。

男子は、夏でも上着を着る自由があり、女子は選択の余地がないというのは絶対におかしなことです。

ところが、今の私がこのような意見を述べることは、「自分のクラスが指導できないから言っている」と思われても仕方がないようで、相手にしてもらえません。だらしないクラスの担任が自分のクラスのだらしなさを指摘され、指導できないから「きまりの方を変えてくれ」と言っているということになってしまふのです。きっと、「担任もだらしない」ということになるのだと思います。

学校という所は、どうでもいいことにこだわって、変わりにくいものだとつくづく感じます。子どもとのトラブルは、その時苦勞しても、必ず何らかの形で解決しますが、対大人のトラブルはなかなかうまくいきません。

銀行員の父が来年で定年退職を迎える。母はここ何年もずっと「離婚したい」と言い続けてきた。もちろん父に面と向かって言ったことはない。いつも愚痴にすぎなかった。しかし、「定年退職」が近づくとつれて心境も変わってきたらしい。とうとう、「来年こそ離婚する」と言い出した。

父は、母のそんな気持ちを全く知らされないまま、毎日仕事の後、パチンコ屋に通っている。四十代後半で支店長になってから、急にはまってしまったらしい。現場の仕事から離れたことが原因のようだが、銀行でも家でも、力はあるが煙たい存在になってしまった父には、パチンコ台だけが慰めなのだろう。毎日、夕方から閉店まで、土日は朝から通いづめて、結構な額の借金をせつせとこさえている。もちろんパチンコは勝つことのほうが少ないわけで、たいがい不機嫌になって帰ってくる。そんな父の行動に、母も祖母も、もう何も言わなくなってしまった。言ったところで反省するわけではないし、怒鳴るのが関の山だ。弟も父を嫌ってあまり口をきかなくなってしまった。

今年の盆休みもいつもと同じだった。父はパチンコに出かけ、弟は友達と遊びに行ってしまった。母だけが家に残り、久々に実家に帰った私はそれにつき合っ、また長い繰り言を聞いていた。さんざん父親のひどい態度を話した後、母がふと「お父さんこない大変なこと言ってたのよねえ」ともらした。鳳啓介の死んだ翌朝、ワイドショーで、元妻の歌子が号泣する姿を見ながら、父が急に「俺が死んだら誰か泣いてくれるかな」とボソリと言ったらしい。「それがねえ、言うとききちょっと頬がびくびくしてるのよね。だから『弘も聡子も泣く

## 父と母の場合

山本聡子

に決まってるじゃない。私も離婚してても泣いてあげる』って言ったら、よい頬がぴくぴくしちゃうってね……」。母は言いながら目を伏せた。そういうことを聞いてくる相手と離婚したいと考えていることについて、そしてそれを相手にきちんと伝えていないということに少し罪悪感を持っているらしかった。

父は日頃から、本当の自分の感情を出さない人だった。多分、素直に伝える術を知らないのだろう。中学生のころ、日曜日に図書館に出かけようとするたびに、「女は休みの日ぐらい家にて家事をしろ！」と怒鳴った。私も毎回泣きながら、怒鳴り返して図書館へ行った。今から思えば父は寂しかったに違いない。「寂しいから一緒にいてほしい」と素直に伝える術を知らなかった。だから家族さえ父から離れてしまった。一度だけ、父の感情を見たような気がしたのは、冬の寒い日に「お父さんのお陰で家であったかく過ごせるんだね」と言ったときだけだった。その日、凍てついた夜空を見て、ふと冗談半分にもらした言葉に、父は私の見た限り、はじめて泣きそうな顔をした。

多分、父は、働けば働くほど家族が父に感謝し、父の側にいつもいてくれるようになると思っていたのかもしれない。きっと、いつも、それを望んでいたのだと思う。でも、そうはならなかった。誰も男である父に、家族に素直に愛情を伝える方法を教えてくれなかった。そして、女である母には、父にそれを求めて怒っていいのだということ、誰も言わなかった。

来年、別れた二人には何が残るだろうか。私は二人にそれを伝えられるだろうか。



# ききまづん・森から

文・井内好子  
絵・中畝治子

それにしても強烈な暑さのこの夏でした。クーラーの影響のせい、急激な温度の変化のせい、治療室は風邪の患者さんで溢れています。

残った今年分最後の玄米を研いでいたら、ふと、ミルフォードのことに思いがとびました。菜食主義者の彼を迎えるために炊き始めた玄米。そして彼のコンサートで出会った音が、鍼灸の道への「招待状」だったこと等々。この思いはWeの夏季フォーラムに参加して、元氣いっぱい息吹に触れたせいでしょうか。二十年近く前にもかかわらず、ときの余韻の鮮やかさのせいでしょうか。六十年代後半の激しいうねりの中で、逃げるように音の世界に入っていく、そこでやっと楽に呼吸ができた穴蔵的ジャズ喫茶。でも、息づいている音は、様々な出会い、発見を与えてくれ、決してとどまらせてはくれない。穴蔵のレコードだけの世界は、人いきれのライブを孕んだ光や汗ある空間へと変わり、自分を、そしてひととの関わりあいを開かせてくれたものでした。ミルフォードとの出会いも、その中の大きなひとつ。

ミルフォード・グレイヴス。ドラマー。

コンサート当日、会場外で受付をしている私にも彼のドラミングは最初の一音からしっかりと入ってきました。足の裏から、肛門から、体全体に……。もう矢も盾もたまらず内に入って聴き入ったものです。彼と共に演奏した日本のミュージシャンたち。私の眼にも、彼らがある局面にいることが感じられ、皆がそれぞれにまぶしかったっけ。

演奏後の席で、彼の口から「スポンティニアス」という言葉が何度も発せら



れました。辞書をひいてみると「自然な、自発的……」とあります。彼の放つ音の広がり、深さは、自発性、主体性を目覚めさせる力でもあったのです。彼のいうフリー・ジャズというのはスポンティニアス・ミュージックのことでした。ちょうど、生きとし生けるものの生命活動が調和と交感の中にあるように、太陽が、月が、海が、川が、虫が、樹々が、人々が同時に光を投げかけあって連続しているものとしてあり、音楽はより生きるため、より開きあうためにこそある、というのが彼の持論でした。

昔の西アフリカのドラマーは、「みんな人間はその人に固有のひとつのビートを持っている」と言い、彼らはすべての音を自分自身に、自分の身体にチューン（調律・調整）し、合わせることを知り、行っていたそうです。そして次に、自然と宇宙にチューンしようとしていたのです。最も基本的なリズムは心臓の鼓動でした。

ミルフォードは当時すでにドラミングによるヒーラーでもあり、漢方医でもありました。当時のフリージャズの一部には、東洋的志向へのうねりも一つの流れとしてあり、私の中に漠然とあった、からだに対する東洋的な考え方は、彼と出会うことによって現実的な要求となり、二年後、鍼灸学校に通うことになりました。

音を生きたこと、はりを生きたこと、それは全く違って、そう違わない連なった世界。「より生きるため、より開きあうための診療室」が原点としてあり続けられますように。



## 居場所考⑥

沈黙という居場所……

水田宗子

やくざや浪人など、家の中や社会の中に、自分の居場所を求めようとしない男の放浪者たちは、日本の大衆文学や映像の中で長らくヒーローであった。ヨーロッパ映画やアメリカ映画でも同じように、忘れ難きヒーローはほとんど社会や家庭の中の安定した役割を捨てた独り者で、どこかから来てどこかへまた一人で去っていく男たちである。西部劇の名作『シェーン』では、風来坊のシェーンが、女と子供という弱者たちを助けて悪者たちをやっつけたあと、追いつがる子供を振りきって荒野の彼方へ消えていくのだが、女の愛も、父親という居場所も捨てて、放浪を続けることを選ぶ男の心のうちは語られることがないし、わが高倉健が演じる放浪の一匹狼もまた、極度に無口である。

ヒーロー像にはやりすたりがあっても、これらの男たちの内面は語られる必要がないほど、本質的に了解済みで、彼らが黙って現れるだけでドラマは成立する。もしこれらの男たちが自分の内面を語って雄弁であったりしたら、むしろ興ざめである。文化の構造は、男たちの孤独も寡黙も放浪もを組み込んで、無難で安心なものにした。それは社会の中で



安定した位置を得て指導的な役割を演じる男たちと同様に、そこからはずれた男たちにもまたヒーローの座を用意し、与えてきた。はぐれ者の内面は、社会秩序を維持するためのカタルシスとして役立ってきたのだが、アウトローの内面までを記号化して組み入れた文化の構造から、男たちはどうやって逃げ出し、そこから自らの内面を救出するのか。現代男流文学が停滞しているのも、その脱出口が見当たらないからではないだろうか。

女のはぐれ者は、その点、まだ恵まれている。それは女自身が、あまり女のはぐれ者の物語を書いてこなかったからである。男の描いた女のはぐれ者の物語は、ほとんどが転落の物語で、墮落した女の心情は哀愁を帯び、同情されることはあっても、男のはぐれ者がヒーローになるようには、ヒロインになることはなかった。男によって書かれた、家を出てはぐれ者になったり、なろうとした女たちは、道徳的に墮落するので自らを滅ぼすというシナリオになっている。女のはぐれ者は、男と同様の文化構造に組み入れられてはきたが、その内面はまだ手つかずの部分が多いのである。

近代の女性文学は、家の中に閉じ込められた女たちの内面の表現とともに、家からの脱出を図った女たちの内面を視座に据えての表現として始まった。岡本かの子や円地文子か〈家霊〉としての女の内面を描いたのなら、田村俊子、平林たい子や林芙美子は、家の外へ、日本の外へと、異郷へさまよい出ていった女たちの内面を描いた。家の中と外、定着への志向と放浪への希求、その両方が女性の自己表現にとって未踏の地であったと同時に、そのどちらにも女の内面の居場所としての安寧がなかった。

家霊となった女たちは、いつも饒舌であつたわけではない。というより、高倉健ほどではないにしても、彼女たちもまた寡黙である。彼女たちの沈黙は、高倉健の沈黙と違って、



例えば田本文子の『女坂』の倫の沈黙のように、不気味である。男たちにとって、女の沈黙は表現されない本当の感情を隠す仮面であり、その背後に潜む感情は邪悪で危険なものと考えられてきた。女の不気味な沈黙は、すでに多くの怪談を生み、それによって、カタルシスも鎮魂もなしえてきた日本文化の構造にビルトインされている。それを逆手にとった田本文子の〈女の自己表現〉は、ゴシックという内面表現への裏道だった。つまり、女の沈黙は男を巻き込む無理心中の道行であり、怪談の始まりかヒステリーの発作の前兆と決められている、そのように記号化された文化の中での、逆説的自己表現であった。

家と社会からはぐれて、異郷を放浪する女たちの自己表現のほうはどうだろうか。今、女たちは家の中から外へ、日本の外へと出て行きつつあるが、それはかならずしも社会の外へと自らをはみ出させていくものではない。家の外へ、日本の外へ、社会の外へとさまよい出る自己を表現しようとした、近代文学の先行者たちの、語られていない内面探究はひとつの課題である。

長い歴史をかけて、文学や映像表現のテキストを通して作り上げられてきた〈女というメタフォア〉から逃れ出るために、女は饒舌に表現すると同時に、沈黙する必要もあった。怪談やヒステリーの予兆ではない、未知の内面領域への道となる沈黙、表現としての沈黙は、例えばマルグリット・ユルスナールやマルグリット・デュラスの根幹を形づくるものとなっているが、日本の現代文学でも、岡本かの子から大庭みな子、高橋たか子、富岡多恵子、津島佑子と、やはり女性表現と想像力の中心を占めているように思える。

千葉 倉持和子

選挙疲れに看病疲れ、そして、「夫Vs妻」にも疲れれた私は、稲邑さんの「貴女、フォーラムに来ない？」の一言で、すっかりその気になる。

「箱根だけど、行ってみない？」と誘うと、「いいよ僕は。君たちだけで行っておいで」などとは、間違っても言わない夫。

「行く」の一言で、伸びかけた羽もいくらか縮むが、こんな夫を支持する人は多い。自然と親しむことの好きな夫が、「箱根」と聞いて断るワケもなく、かくして、初めてのフォーラムに家族全員（8歳と5歳の息子）で参加となった。

子供はともかく、大丈夫かな。「We」なんて知らないし、フェミニズムなんて大嫌いなあの夫を連れて行って。いつも私と議論する調子で、誰かとやらなければいけないけれど。一抹の不安がよぎった。でも、その時、今回のテーマの「いろはの異」が、

三倍くらいの大きさになって目に飛び込んだ。途端に、「まっ、いいか」とタカをくくことに決めた。「We」の人たちも、それなりに受け入れてくれると信じて。

一日中、兄弟げんかの仲裁ばかりだった日が、到着と同時に解消されると、三食と温泉付きの、優雅なカルチャーライフに転じて行った。同室の人たちとの、楽しい会話。こんな所で、こんな人に出会えたという喜び。そして、署名欲しさに参加した忘年会以来、二年ぶりに再会した、見覚えのある顔また顔。やっぱり来て良かった。

しかし、そう思ったのも束の間。案の定、初日から彼はやってくれたのだ。全体会講師の戸田さんに向かって「いろはの異」。

夜の交流会でも「いろはの異」。聞き捨てならない夫の発言に追及の反論は引きも切らない。ある女性などは怒り出して、「私なんてこんな所に居るのかしら」なんて言い出すし、全くもって最悪だった。彼女で

なくとも、「私なんてこんなのと一緒なのかしら」と我が身をば呪った次第。

それでも二日目からは開き直り、分科会も別々なので、私は私で楽しむことができた。見れば、たまにホテルの廊下ですれ違う我が子も、すっかりフォーラムの子ども団になりきって、言葉も交わさずさっさと通りすぎてしまふし、家族の絆なんて、この場に及んではうっとおしいというのが、私達ひとりひとりの真の姿だったよう。

あまりの疎遠な様相に、「これは松戸離婚か、一家離散か」と、少しばかり心配したけれど、帰りの車中では子ども団の報告を聞きながら、不思議と和やかに過ごすことができた。

「ラモス、けんせい、えんぼう、あけみちゃん」と、お世話になったコーチの名前が松戸に着くまで何回出できただろう。ちょっとの間に大きくなった子どもたちの口から、楽しそうに名前を聞かされるたびに、

感謝の気持ちでいっぱいになった。

「いい加減な読者」を自認する私も、帰ってからは、二年分の『We』をかき集めて書棚の真ん中に置いてみた。「資源ゴミに出さないで良かった」と、にわかには大切に思えて、今は読みこぼした所（その方が多いが）を拾っている。

「あつWeの会の本だ」と息子が見つける。「えっ、どうして分かるの」と聞けば「だって、ホテルの階段の所でたくさん売っていたもの」と、納得のいく答え。

これからは、ボランティア精神の「積んどく読者」から、一步入って行けるかな。

フォーラムのスタッフの皆さん、いい夏休みの思い出をありがとう。

追伸。先日、夫の開けっ放しの通勤バッグから『We』が覗いているのを見てびっくり。「貸して」って、一言ぐらい言えればいいのにな。

\* \* \*

埼玉 藤原裕子

8・9月号の「私がなぜアジアに行くの

か」を読んで、電車の中だったので、涙を

こらえるのに大変でした。そして、「部落差別体験を通して……」を読んで、ハタと気がついたのです。慰安婦問題や、人身売買の記事を読むたびにその怒りは、顔のない大ぜいの男たちに向けられていたけれど、私たちの女性性への嫌がらせや暴力を許している責任は、女性にもあるんだということ。部落を差別するように、アジアの国を差別し、慰安婦達と同じようにアジアの女性を暴力と金で支配する、そんな人が身近にいる日本に、今生きている私達にも責任があるんですね。

それじゃ、どうすればいいんでしょう。部落差別、戦争、売春等自分には無関係にはほとんど生きてきたんです。

そして、男性にとって慰安婦や売春という行為は、それが「自分の種を広くばらまく」本能によるもので、女性には理解しがたいことなのか、支配欲、破壊欲、サディスティックなもので人を見下す快感？ 社会的な立場が変われば私も平気でやってみ

たくなるものなのか、分かりません。

ただ、夏の合宿で「たんべさん」にお会いして、頭の中だけで考えてモヤモヤしていたことがすくスキリしたことで、その時、「私達にできることは何ですか」という問に対して、「二人一人が一人以上の人に、今日のこの事を伝えてほしい」とおっしゃったその言葉ですごく救われた想いがしたのです。

本当に無知な私ですが、これからも、頭で考えるにとどまらないで、できるだけ、目や耳、身体で確かめていきたいと思えます。

\* \* \*

東京 高橋晶子

7月号の感想も送らないうちに8・9月号が届いてしまい、しまったと思いました。が、やはり即開封して一気に読んでしまった私です。

松井やよりさんのインタビューで、青年海外協力隊員だった人が……の下りにギョツとして、「本当だったんだ」と、以前聞いたイヤな話を思い出しました。

現地の人に比べると、はるかに良い待遇が得られるので、えらぶったり、ぜいたくをする人もいるというのです。私の友人にも、何人も隊員としてネパールや中国に行

った人もいますが、皆女性だからでしょうか。とにかく懸命にやってきた人ばかりなので、イヤな話はウソだと思いたかったのです。本当に根が深いですね。松井さんが、「いくら日本がきらいでも、結局日本を何とかするしかないと思って帰ってきた」源は何なのでしょう？ 単なる責任感だけではなさそうですが。

石名久さんの「ひとりNGO」には本当にびっくりしました。そして希望がもてました。組織嫌いの私でも、何かできるようなるかもしれないと。貯木場の話は初耳で熱帯林の破壊だけでなく、自国の環境もこわしていることを知って、うしろめたさはへったものの、やはり暗くなります。挙句のはて、それらでつくられた家は、日本の風土にあわない作りで、アレルギーを急増させているのですから。まさしく、一握り

の利益独占者のための木材輸入なのです。動物の進化の原動力が「病」や「弱さ」であったというのも、新鮮な指摘です。そう考えると、とても楽になれます。

高橋くら子さん、部落差別は、私自身の38年間には、一度も直接体験はありません。たぶん、知らなかっただけなのでしょうが。一年前、大阪に転居することになった知人が、「アパートを探すのは、私にはできない。同和地区かどうかわからないから」と話した時にはびっくりしました。とっても有能で博学で前向きな生き方をしている女性の口から出たことばなのです。「別に同和地区だからっていいじゃない。何がいけないの？」とたずねる私に、「いろいろあるらしいからね、やっぱり……」とことばを濁していました。この感覚が差別を継続させているのです。具体的に何がどう悪いとは指摘できないにもかかわらず、何となくの雰囲気や聞きかじりや思い込みが恐ろしいほどに続いて抑圧していくのを断ち切るには、今回のように、辛さ、くやしさを

を知らせていくことはとても有効だと思います。この項、コピーをして、その知人に送ってみますね。最後の一行、私にもグサリとききました。

「性を語る」。こんな授業を受けていたら、私はどんな風に反応したかな、と思いがら読みました。「感じたことを書かなきゃだめですか？」と質問した生徒に蔵本さんは、どう答えられたのでしょうか？ また、「初体験はいつ？」等には、どう答えたのか、とても気になりました。語りたがらない事柄だけに、まず教える側、発話する側が自分の意見を述べることは必要でしょう。ただ、その時、経験をそのまま伝えることが必要かどうかは私にもよくわかりません。読み応えのある一冊が、また増えました。ありがとうございます！

☆モンペハウスにやっとなってきました。十数本試着し、三本買いました。とても楽しい買い物でした。周囲にも「面白い」ステキ」と、とても好評です。気分が明るくなります。

# Weの屋台村

◆「Weの屋台村」は、読者の皆さんの「解放区」です。「We関西編集室」(☎657 神戸市灘区上野通七―一四 吉田清彦方)まで、どんなにお便りお寄せください。

◇いつも『We』を読んでいます。

私は、今年、新卒新任の、家庭科の教師です(大阪・高校)。教師になって間もなく、悩むことの多い毎日ですが、今、特にどう考えてよいか分からないことが、「退学」です。

私の赴任校は、府下でも最も退学者の多い高校の一つとされています。一学期中に、すでに、十名以上のものが退学し、一年生

不登校者も数名います。彼らにとって退学は必ずしも「悪」であるのか、我々教師は何が何でも彼らを引き止めるべきなのか、よく分からないのです。

皆さんは、どうお考えですか？

いろいろな意見を、また、『We』で取り上げていただければ、うれしいです。

(N・I 大阪・女・20代)

◇ある日の会話。

A「大学に障害者が入学してくると、スロープをつけろ、エレベーターをつけろと、いろいろ要求するけど、それは甘えだ。今の状況のまま、自分がまわりに声をかけて動けばいいんだよ」。

私「なんで、障害者ばかりが努力しなきゃなんねんだい。私たちが、障害者の人が暮らしやすいところまでおきていくのには、何の努力もいらねえじゃないか」。

(石橋満里子・東京・40代)

◇今年の夏は、子宮筋腫の手術のため、フ

ォーラムにも出れなかったし、ベッドにしばらくつけられた日々もあったし、つらかった。健康で活動できることが何よりも幸せなことを、今さらながら感じています。

来年の関西でのフォーラムには、ぜひ参加するつもりで、体力をつけています。

(磯部幸江・埼玉・40代)

◇関西の方って、元気ですね(はたから見ただけで元気だと決めつけるのも迷惑な話だけど)。広島の元気人間も、ほとんど関西から来た人です。

(香川恭子・広島・30代)

◇帰ってきて『We』(5月号)が来ているのを見つけて、いつものようにパラパラと読みはじめた。エイズの特集だったせいもあるのでしょうか、「女にとってセックスは……」といった表現が目につき、こういう感覚とは最近遠いなあと思った。「女にとってセックスは、常に何らかの不安を伴う」という感覚——。自分が鈍感になっ

てきたつもりもないのだが、不安感、恐怖感で、正直言って、ない。

今つきあってる相手(♂)とのかかわり方かもしれない。あるいは、自分が少しは年をくったからかもしれない(今、20代半ば)。前に、20代の初めごろつきあっていた人(♂)とのセックスには、確かに不安があった。コンドームは自分でちゃんとつける人だったし、無理強いわれたというわけでもないが、しかし私にとっては「常に不安が伴う」というのがセックスであった。現在の相手と何か違うかといって、コレと出せるわけではないのだが。

そんなことを思い出しながら、今つきあってるSに電話をした。

「(これこれこういう原稿を)読んで、こわいとか不安だとか、そういう感じが、よく考えたら、今の自分にはないなと思ってん。Sとセックスすんのかって、おもしろいし。でも前は、こういう不安、恐怖って、

結構あってん。…ところで、Sはセックスするときに、こわいって思たことある？」

「こわいっていうか、やることやってるから(子どもが)できる可能性はあるよなとか、避妊について言うたら、コンドームだけで100%だじょうぶってわけじゃないし。まあ、しきんとは、もしかしたら、重さは違ってもしれんけど」

「なんでやるなあ。私、どないかなると思うようになったからかなあ」

Sとのセックスは楽しい、おもしろい。

彼に言わせれば、「しきんの方がえっちなす」と。どっちの方がえっちなすでもいいんやけど、コンドームをかぶったちんちん(ペニス、というべきか)を、「ゴム頭巾ちゃん」と呼んで可愛がっているのは私です。

特集で原稿書いていた人が何歳くらいの人なのかわからなくて、「女にとって…常に…」という表現に、少しばかり(女せんぶがそう感じてんのかなあ)と思いまし

て。いや、もちろん、話の中身はわかるのですが…。

やはり「嫌われたくない」とセックスする人やら、「隠すべき」と思ってる人やら、多いのだろうか。そして、いったいどうして私は、不安や恐怖をおぼえなくなったんだろうか…。

私も「自分が、私が」というところでしか話しようせんので、「女性にとって」という話にはならないでしょうが、こういう感覚もありかなと思ったので、書いてみました。

(L・大阪・女・20代)

◇四月号の「母の心残り」が面白かったです。私は、幼い頃の家族についての記憶といえ、チャップリンの映画ではないのですが、おかしいに物悲しいような記憶が多くて、そのことを思い出してしまいました。

(S・テイキング・熊本・女・20代)

私が、今、一番腹を立てていること

(94・9実施)

◇上昇志向。そんなに働いてどうする。

(C・Y 埼玉・女・30代)

◇女性の性の商品化(ポルノビデオ、スポーツ紙の女性の裸など)。日本の男性の貧しい女性観。

(Y・Y 大阪・女・40代)

◇(1)戦争により、多くの子供や老人、女性が殺され、傷ついていること。(腹立たしいよりも悲しい)

(2)日本の天皇制。

(辻本すみ子・東京・30代)

◇今の政治家は何!

(理加・広島・女・30代)

◇消費ということに企業や国(政府)が懸命になる時代は終わったと思うのに、まだ自分達の利益のことばかり考えて、どんどん自然を破壊していること。

(Fujiwara・東京・女・30代)

◇環境問題がこんなにも取りざたされているのに、あまり好転していないこと。

(山浦恵津子・東京・40代)

◇農業を国がまもってくれない。農業だけでは、なかなか食べていけない現実。

(S・Y 福井・女・20代)

◇一方的な減反。日本や他国の農にかかわる人たちが、「消費者」のきまぐれなどに、ほんろうされていること。結局「消費者」自身の首をしめるものだと思いますが。

(杉山百合子・東京・40代)

◇(1)日本航路の飛行機のみ、禁煙でないこと。他の航路では各社全面禁煙なのに…。

(日本行きの飛行機は古いのを使われるよ、きつと。とっても危険。)それから、JAL

は他航路でも喫煙可なんだって。

Canadian Air Line だけは日本向きも禁煙だっていうから、好き。

(2) 外で歩きながら火煙草を吸うことが許されている社会。

(マッチ・東京・女・40代)

◇ゴミを平気で(私から見ると、そう思える)道路などにすてる人間が多い。

(佐竹ひろみ・広島・33歳)

◇ゴミの多さ。労働条件の悪さ(職場にクーラーがない)。賃金格差(大企業との格差)。

(K・T 兵庫・女・30代)

◇(1)特養で寮母をしています。国の定めた基準職員数ではとうてい到達不可能な評価基準なるものを打ち出して責めたてています。頭にきまず。

(2)片方で環境汚染を叫びながら、片方で高速道路の早期着工をと、当然のような顔をして言う人を見ると、腹が立ちます。

(小手川和子・大分・40代)

◇物価高。消費税。管理的な世の中の学習内容の高度化、管理的な教育。

(匿名・広島・女・40代)

◇(1)文部省に連なる県教委(市教委)、学校長の管理的な制度の強化。学校差を作り、差別教育をしています。

(2)司法が行政に牛耳られて、司法の独立制がなくなっている。例えば、高塚高校事件

でも、その傾向が強い。

(橋本幸子・兵庫・70代)

◇管理教育的な学校の体質が、私の時代と現在の子供の時代と変わりなく、改善がみられない。根本的には、学習指導要領からの大幅な見直しを願っている。

子供の保護者に学校のチェック機能を持たせては？今は、親が子供の保護者とならないで、学校・教師と一緒にあって、子供を受験競争においたでている。PTAと称して、なれあいを図っている。

(M・Y 広島・女・40代)

◇(1)熱意のない教師。(2)モノ、カネ中心の日本社会。(3)だらしない親。

(N・I 大阪・女・20代)

◇不登校をはじめ、標準服など子どもの権利に関することでフォーラムを持つと、赤字になるほど人々の関心が薄い。特に広島は、すくなくとも子供がしろにされているように感じている。

(香川恭子・広島・30代)

◇現場の教師自身が現状を認識し、子供達

のために自己改革&結集できない余裕の無さ。

(H・O 山形・女・30代)

◇学校社会の中において(教員です)、変だと思ふことを改めていけない自分が腹立たしい。そして、変だと思ふ感覚もマとしていることも。

(磯部幸江・埼玉・40代)

◇1994年、地球は、政治的、社会的、環境学的、文化的等、あらゆる問題と矛盾に満ち満ちている。これら諸問題の原因を探り、解決策を模索し、具体的に取り組んでいる人々の数が圧倒的に少ないこと。

大多数の人々は、マスメディアや「ブーム」や「仕事」とやらに踊らされ、自身の生き方に納得していないのに、手も足も出ない状況に追い込まれていること。

これこそ、今、私が一番腹立たしく思っていることである。

では、どうしたらいいか。社会矛盾を解決するためには、どういう方法があるか？

(中略)私ができることは、『運動』ではな

く、まず、謙虚に学問すること。学問すればするほど、つまり物事を知れば知るほど、自分が、人間が、いかに無知であり、無力であるかを知る。

中途半端に学問した人間、「変に優れた人間」には、他人を理解する能力が欠落しているケースが多い。こういう人は愚鈍で滑稽で、あわれた。(中略)

腹立たしい現実を前に、常に感じるが、ただ腹を立てても現実には変わらない。すぐ『運動』に走るのではなく、素直に学問し、感じとり、自分の意見や思いを広く伝えることが大切。

(中略)結局「歴史は繰り返す」のかも知れないが、今の私にできることは、学問して伝えること。それが私自身にとっても、広く社会にとっても有益であれば、私は一人納得するより仕方ない。哀しいかな、それしかない。でも、その為なら、何でもするーどんなことでもするー権力なんか恐くない。死をも恐れないよ、あたしは！

(高橋七重・東京・30代)

♥お腹の中の小さいエイリアンはグリゲリとよく動く。触りながら娘は、「赤ちゃん生まれたら絵本読んであげるね」と張り切っているかと思うと、自分はしっかり赤ちゃん返りをしている。

「パンツはかせてー」などとダダをこねているのを見ると、彼女なりに小さな胸で葛藤を繰り返しているのだろう。それにしても、一度膨らんだ風船は膨らみ易いものだが、7カ月目にして臨月近いお腹。季節が変わって、涼しくなっていくのだけがまだ救いである。(野瀬)

♣最後の版下制作が大詰めになると、事務所泊まり込むのは恒例になっていたが、最近はそのでなくとも、夕飯の後片付けが済むと、さっさと事務所に引き上げ、推理小説など読んで寝てしまう。朝になると朝ごはんの支度に出勤。水田さんの「居場所考」ではないけれど、せっかく自分の居場所があるのだから小説でも書きたいところだが、そこまでの能力はない。住み込みの家政婦だったのが通いの家政婦に昇格(?)した程度。でも、この生活はやめられない。ウゥゥ。(河村)

●いろんな方にお会いしてお話をお聞きするうちに、地域の雑多なエネルギーを学校に取り込もうという当初のタイトル「カオスを学校へ」は、例のごとく土壇場で変更となり「教育—つながりを取り戻す」に。お互いの違いを際立たせ、認め合うことで、つながりを求めていく。その柔らかで力強いエネルギーに、感動し、はっとしました。●8/9月号の『四人冗語』の武田秀夫さんの文章中、「軍国主義」とあるのは「軍国少年」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。(中村)

★夏のフォーラムは名実ともに「いろいろの異」。どこへ行くのか予測できない、面白いけど危ない三日間でした。戸田三三冬さんの全体会「アナーキズムと家族」から分科会「女性と新興宗教」で図らずも浮上してきた自立と依存、個と全体のテーマを2・3月号で探ってみたいと思います。1月号は「働く」がテーマですが、まだ、全体のイメージがピタッと決まっていません。ぜひこういう記事をとというのがありましたら、お知らせ下さい。次号は「自分の福祉を創り出す」です。(稲邑)

■『四人冗語』を連載中の武田秀夫さんと木村栄さんの新刊が出ました。『セイレーンの誘惑—漱石と賢治』(現代書館2369円)は、賢治と漱石にひきつけられた武田さんの、絶妙なエッセイ。木村さんの『三十年目の同窓会』(筑摩書房1850円)は戦後民主主義第一期生として時代の先端を走るべく期待されたお茶の水女子大卒業生の軌跡を辿り「女の時代」の内実を問いかけています。連載の短い文章に物足りなさをお感じの方、どうぞ手にとって十分にお二人の世界を味わって下さい。

■詳しいことは次号でお知らせしますが、来年4月より「WE編集室」を会社化して経営の安定を図る計画を進めています。Weの人材を生かした各種の講座や、単行本の編集・発行もしていこうとプランを練っていますが、他にこんなことをやったら等、いい案がありましたら、ご協力下さい。会社化に当たり、出資金の公募をします。1口5万円で40口ほど募集します。また、渋谷近辺で、10坪で月10万程度の物件を探しています。心当たりがありましたらお知らせ下さい。(編)

くらしと教育をつなぐ—We

Vol. 3 No. 6 1994年10月15日発行

定価600円 (本体583円)

年間購読料/定価6800円(送料共)

発行/Weの会 編集/稲邑恭子 河村ふみ 中村泰子

〒225 神奈川県横浜市緑区市が尾町1161-8

共学舎内 ☎・FAX 045(974)3101

郵便振替 東京3-754314 WE編集室

三菱銀行 大久保支店 普0264724

印刷/(有)イー・エム・ビー 〒代田区田圃橋2 5 2

現代書館

東京都千代田区三崎町2-2-12  
電話03(3261)0778 振替00120-3-83725

\* 価格は悪税込みです

武田秀夫 著  
2000円  
セイレーンの誘惑

漱石と賢治

賢治の心の闇に差す漱石の翳。賢治は漱石の影響をどれほど受けたらうか。これまでほとんど気が付かれていなかった漱石の影を綿密な考証によって明らかにした。著者・漱石・賢治の三人の同心象。

山下恒男 著

子どもという不安——情報社会の「リアル」

現実の子どもとオトナが抱えている子ども観との亀裂が修復不可能なほど拡大している現在。オトナに不安を生じさせる存在となっている子どもを通し、オトナを考えた。

斎藤文男・柳 淑子 編著

子どもたちは平和をつくれるか

戦後50年、戦争を知らない教師達はどう子ども達に平和を教えるのか。否その前に教師は平和をどうとらえらるべきのか。現在の危うい平和と戦争の中で学校現場からの提案。

しんぐるまざーず・ふぉーらむ 編著

母子家庭にカンパイ!

離婚・非婚を子どもとともに生きるあなたへ  
母子家庭は「かわいそう」「じやない」。母子家庭をステキに生きる女達が贈る、生きる智慧と勇氣・情報満載の本。

21世紀を織る女たちの会 編

母さん、だいじょうぶだよ

男女雇用機会均等法が施行され働く女性が増加している中、子供たちは母親をどう受けとめているのか。小・中・高・大学生のアンケート、作文により子供たちの肉声に迫る。

ニホン・ミックの新聞の切り抜き専門誌には、  
全国の貴重な新聞記事情報が集録されています!



ニホン・ミックの新聞の切り抜き専門誌

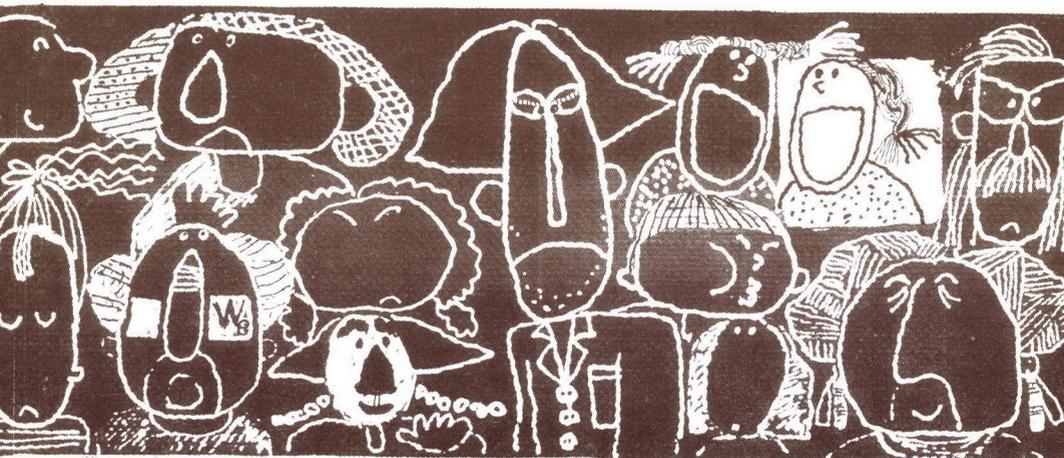
<p>月2刊 切抜き速報</p> <p>全国の教育に関する新聞情報を収集、分類、整理… <b>教育版</b> ★1ヶ年—24冊発行 ★年間料金 (1ヶ年前納) 29,520円</p>	<p>月刊</p> <p>「考える社会科」の実践に、現実社会の生きた資料を! <b>社会科版</b> ★1ヶ年—12冊発行 ★年間料金 (1ヶ年前納) 18,000円</p>
<p>月刊</p> <p>新聞コラムでつづる今 <b>コラム歳時記</b> ★1ヶ年—12冊発行 ★年間料金 (1ヶ年前納) 15,000円</p>	<p>月刊</p> <p>全国の幼児教育に関する記事を一冊に集録(1ヶ年分) <b>保育と幼児教育版</b> ★1ヶ年—12冊発行 ★年間料金 (1ヶ年前納) 18,000円</p>
<p>月刊</p> <p>子どもの一からたの健康・こころの健康・生活の健康 <b>健康教育版</b> ★1ヶ年—12冊発行 ★年間料金 (1ヶ年前納) 18,000円</p>	<p>月刊</p> <p>科学的な視野でみた生活情報を新聞記事より収録 <b>生活と科学版</b> ★1ヶ年—12冊発行 ★年間料金 (1ヶ年前納) 18,000円</p>
<p>月刊</p> <p>暮らしを取り巻く高度な科学・自然の動きを教材に <b>科学版</b> ★1ヶ年—12冊発行 ★年間料金 (1ヶ年前納) 18,000円</p>	<p>月刊</p> <p>社会のできごと、身近なことから新聞から学習する… <b>Primary School</b> ★1ヶ年—12冊発行 ★年間料金 (1ヶ年前納) 18,000円</p>

\* お問合せ・お申込みは \*

東京本部 03(3667)9871 (代)  
大阪本部 06(365)1560 (代)



株式会社ニホンミック  
東京本部 〒103 東京都中央区日本橋茅場町2丁目16番7号(本間ビル)  
郵便振替口座 東京 0-127517  
大阪本部 〒530 大阪府北区天神西御6番7号(フライン・アートビル)  
郵便振替口座 大阪 5-85224



くらしと教育をつなぐWe 1994年10月15日発行 第3巻第6号  
定価600円(本体583円 年間購読6800円送料共)  
郵便振替 東京3-754314 WE編集室